和歌山市文化体育振興事業団調査報告書　第35集

史跡和歌山城 第25・26次発掘調査概報

2002

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

序　文

和歌山城の立地する和歌山市は、和歌山県の北部に位置し、奈良県の大台ヶ原に源を発する紀ノ川によって運ばれた土砂により形成された和歌山平野を中心とした地域であります。和歌山城はその紀ノ川南岸平野部に位置しています。和歌山城の築城は天正13（1585）年、豊臣秀吉の命により行われ、慶長５（1600）年からの浅野氏を経て、元和５（1619）年に徳川頼宣が入城してからは御三家の一つ紀州徳川家の居城となります。現在は公園として整備され、和歌山市民の憩いの場となっております。

今回の調査は二の丸と西の丸の間に架けられていた御橋廊下の復元整備に伴うものが中心です。調査の結果、御橋廊下の取付き部分と周辺の多聞櫓について３時期の遺構を確認することができ、その変遷を知る上で重要な手がかりを得ることができました。

ここに報告する概要報告書が、地域の歴史の解明に活用されれば幸いです。本書が広く私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査にあたり御指導、御協力を頂きました関係各位の皆様に深く感謝いたします。

平成14年３月31日

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

理事長　喜　多　誠　一

例　言

1．本書は和歌山市が計画した和歌山市一番丁３番地に所在する和歌山城の御橋廊下復元整備及び石垣改修工事に伴う発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、和歌山市の委託事業として財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託し、対象面積470㎡を2001年９月20日から2002年３月18日までの期間で実施した。

3．発掘調査及び報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

和歌山市教育委員会		財団法人和歌山市文化体育振興事業団	
教育長	山口喜一郎	理事長	喜多誠一
文化財室長	榎本直樹	総務室長	髙野眞次郎
文化財班長	田中郁次	総務室班長	久保雅英
学芸員	益田雅司	主任	山口美二（文化財事務担当）
		学芸員	髙橋方紀（発掘調査担当）

4．本書の執筆は発掘調査担当の髙橋の他、同財団学芸員北野隆亮、奥村薫が分担し、編集は髙橋が行った。各執筆分担の文責は目次に示した。

5．本概報掲載の遺跡・遺構写真撮影は髙橋・北野が、また遺物写真撮影は髙橋が行った。

6．写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。

7．本書に用いた石垣立面図のうち、第26次調査のものは和歌山市産業部和歌山城管理事務所から提供を受けた。

8．瓦の名称・計測部位等については、和歌山市文化体育振興事業団調査報告書第22集の凡例に準拠している。また桟瓦は通例、建物側からみて右に桟が位置するものを右桟瓦、逆の場合を左桟瓦と呼称しており、本稿でもこれに従って分類をしている。

9．文字資料の判読については、和歌山市立博物館名誉館長三尾功氏に御教示を受けた。また、粉河寺、旧中筋家住宅の瓦のデータについては、㈶和歌山県文化財センター文化財建造物課鳴海祥博・御船達雄両氏から御教示を受けた。記して感謝申し上げます。

10．概要報告書作成にあたり、関係機関等の方々に有益な御教示・御指導を賜ったことに感謝の意を表します。

本文目次

1．調査の契機と経過……（高橋方紀）…… 1

2．位置と環境……（高橋）…… 2

3．既往の調査……（北野隆亮）…… 4

4．第25次調査

（1）調査の概要……（高橋）…… 6

（2）遺構……（高橋・北野）…… 8

（3）遺物

［土器・陶磁器］……（奥村　薫）…… 18

［瓦］……（高橋）…… 20

［金属製品］……（奥村）…… 26

5．第26次調査

（1）調査の概要 ……（高橋）…… 27

（2）遺構 ……（〃）…… 27

（3）遺物 ……（奥村）…… 31

6．まとめ

（1）二の丸櫓台石垣上面建物の変遷 ……（高橋）…… 32

（2）二の丸櫓台石垣検出の石室について ……（北野）…… 33

（3）御橋廊下関連の瓦について ……（高橋）…… 35

（4）軒瓦のセット関係と土塀の瓦の推定 ……（〃）…… 37

（5）平瓦の厚さ度数分布からみた瓦の層位的帰属の検討 ……（〃）…… 38

（6）丸・平瓦の重量比率からみた多門櫓屋根瓦の推定 ……（〃）…… 40

報告書抄録…… 42

図版目次

図版１　第25次調査　調査前の状況（東から）、調査地遠景（上が東）

図版２　第25次調査　調査地土層堆積状況（X=－196513m付近）（東から）

第１遺構面全景（北東から）

図版３　第25次調査　第１遺構面 御橋廊下庇柱礎石周辺（東から）

第１遺構面 御橋廊下庇柱礎石（南側）（南から）

図版４　第25次調査　SH－１（北から）、SH－１礎石撤去後（X=－196504m付近）（南から）

図版５　第25次調査　SH－１古段階礎石抜取痕（南から）、SH－１南端部土塀基礎（北東から）

図版６　第25次調査　二の丸側石垣上端部 漆喰列（北西から）、SH－２・３（北から）

図版７　第25次調査　第２遺構面 全景（北東から）、第２遺構面 御橋廊下関連礎石周辺（東から）

図版８　第25次調査　御橋廊下関連礎石（東から）、塼敷遺構（西から）

図版９　第25次調査　第4b層焼土とSH－４礎石列（北東から）、第３遺構面 全景（東から）

図版10　第25次調査　第２・３遺構面 御橋廊下関連礎石と石室（東から）

SH－４礎石と下部で検出されたSH－５礎石（南から）

図版11　第25次調査　SX－１ 閉塞状況（東から）、SX－１ 全景（東から）

図版12　第25次調査　SX－１ 全景（北東から）、SX－１ 土層堆積状況（北から）

図版13　第25次調査　SX－１ 奥壁断割状況（北から）、SX－１ 北壁断割状況（東から）

図版14　第25次調査　SD－１ 検出状況（南から）、SD－１ 完掘状況（東から）

図版15　第25次調査　石垣北側断面（南から）、石垣南側断面（北から）

図版16　第26次調査　調査前の状況（南西から）、調査地全景（西から）

図版17　第26次調査　石垣上面土層堆積状況（J－J'）（南から）、南端部石垣構築状況（北西から）

図版18　第26次調査　現在の排水溝開口部（西から）、石垣断面状況（K－K'）（南西から）

図版19　第26次調査　水路北側木杭検出状況（北から）、石垣断面状況（X=－196754m付近）（北から）

図版20　第26次調査　北端部石垣構築状況（南西から）、北端部石垣撤去後（南から）

図版21　第25次遺物　土師器、備前焼、肥前系陶磁器、瀬戸美濃系陶器、陶器

図版22　第25次遺物　軒丸瓦

図版23　第25次遺物　軒平瓦、丸瓦、平瓦

図版24　第25次遺物　滴水瓦、軒桟瓦、桟瓦、面戸瓦

図版25　第25次遺物　刻印をもつ瓦、面戸瓦、鬼瓦、板塀瓦、海鼠壁瓦、塼

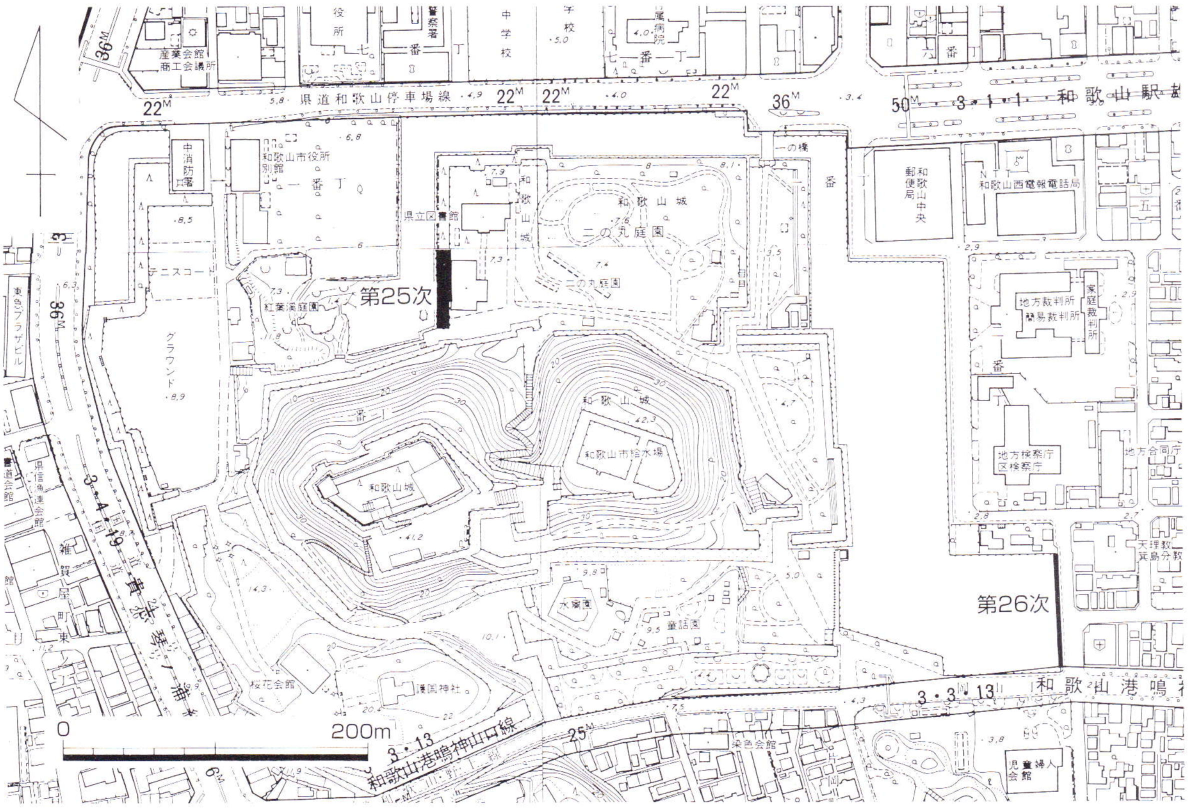
図版26　第25・26次遺物　鉄釘、鉄製鎹、銅製蓋、備前焼、中国製染付、肥前系磁器

１．調査に至る契機と経過

国指定史跡である和歌山城は、紀ノ川下流域南岸の平野部に存在する独立丘陵、岡山に築かれた平山城である。今回は二の丸西部御橋廊下取り付き部分（第25次調査）と東堀南東部西面石垣（第26次調査）の２ヶ所について調査を行った（第１図）。

第25次調査は、和歌山市が史跡和歌山城地方拠点史跡等総合整備事業で実施する御橋廊下の復元整備に伴うものである。御橋廊下は二の丸と西の丸に架けられていた橋で、平成11年度実施の第22次調査では、最終段階の御橋廊下に伴うとみられる橋脚基礎と二の丸側取付部の庇柱礎石が確認されている。今回、整備に伴って二の丸側石垣の解体・修復工事を実施する必要性が生じたため、これに先立って発掘調査を行ったものである。調査範囲は第22次調査の第１区を含むもので、御橋廊下取り付き部周辺及び下層遺構の確認を主眼において調査を行った。また第26次調査は一部崩落がみられる石垣の積み直しに伴うもので、周辺の遺構確認及び石垣の構造解明を目的としたものである。

発掘調査は、和歌山市教育委員会の指導のもとに、同市から財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託して実施したもので、第25次調査は平成13年９月20日から平成14年１月30日、第26次調査は平成14年２月１日から３月18日までの合計約６ヶ月の期間で行った。



第１図　調査位置図

2．位置と環境

和歌山市は和歌山県の北西端に位置しており、北は和泉山脈を境として大阪府泉南郡岬町・阪南市、東は和歌山県那賀郡岩出町・貴志川町、南は海南市に隣接している。奈良県の大台ヶ原に源を発する紀ノ川は、本市のほぼ中央を西流して紀伊水道に注いでおり、その過程で運ばれた土砂によって形成された沖積平野が和歌山平野である。古代においては、磯ノ浦から海岸線に沿って大規模な砂州が形成されており、このために紀ノ川は狐島付近で大きく屈曲して和歌浦湾に注いでいたとされている。この海岸砂州に位置する独立丘陵、岡山に和歌山城は築かれている（第２図）。

周辺の遺跡を概観すると、縄文時代の遺跡として鳴神貝塚（19）、禰宜貝塚が知られている。鳴神貝塚からは縄文時代中期から晩期の土器が多く出土しているが、その貝層の中に海水系の貝殻が多くみられることから、当時の海岸線は同遺跡周辺の岩橋山塊西麓あたりまで及んでいたと推定されている。弥生時代になると遺跡の数は増加し、太田・黒田遺跡（10）・秋月遺跡（13）を初めとする集落が平野部に展開するようになる。古墳時代においても鳴神遺跡群や友田町遺跡（７）、田屋遺跡、西田井遺跡などの集落が平野部に営まれ、鳴神Ⅴ遺跡（15）では水田跡が検出されている。

奈良時代になると南海道に面する形で直川廃寺跡や上野廃寺跡、山口廃寺跡等の寺院が建立される。また鳴神Ⅴ遺跡では平安時代中期を中心に多くの土器が出土しているが、その中には緑釉陶器や輸入陶磁器、陶硯などが出土していることから、当該期において官衙的な施設があったと考えられている。

鎌倉から室町時代にかけては、太田城跡（11）とも重なる太田・黒田遺跡において多くの遺物が出土している。戦国期には紀ノ川下流域の土豪は雑賀衆と呼ばれる集団をつくり、本願寺の門徒組織を利用して在地支配を続け、本願寺とともに織田信長・羽柴秀吉に敵対するが、その雑賀衆の土橋氏が「土橋構」を構えた地が岡山であったと考えられ、これに関連するとみられる「天正七年三月廿五日」銘の瓦製さげ振りが、天守閣再建工事の際に出土している。また調査において室町時代の瓦や石仏等が出土していることから、一時期には寺院であった場所を当該期には城郭として利用したことが推定されている。

天正13年４月に太田城を攻め落とし、紀州を平定した秀吉は、異父弟である秀長に領有させて和歌山城の築城を命じる。しかし、秀長は同年６月の四国攻めの後、大和郡山城に在城し和歌山城に戻ることはなかったため、翌年、城代として家臣の桑山重晴が３万石で入城した。『紀伊続風土記』によると、天正13年の内には本丸、二の丸（徳川期の天守台、本丸御殿）の普請が完成していたとされるが、詳細は不明である。なお結晶片岩を用いた野面積みの石垣は、その本丸、二の丸の周辺でみられることから創建期のものと考えられており、石垣改修に伴う調査（第13・17・18・20次）では、整形した岩盤の上に直接基底石を据えていることが明らかになっている。浅野期にもこの城内の普請・作事は継続して行われたが、その石垣石材には創建期とは異なり砂岩を用いたとされる。徳川期に入って２年後の元和７（1621）年、頼宣は将軍秀忠から銀2000貫を与えられ、城郭・城下町の拡張、整備に着手したとされる。その改修は今回の調査地である二の丸西部をはじめ、砂の丸、南の丸の拡張や高石垣の構築を行う大規模なものであったといわれるが、この時期の石垣にも砂岩が用いられたようである。また、５代藩主の徳川吉宗の時代には花崗斑岩の石垣が構築されたといわれている。このように和歌山城の石垣は時期によって異なる石材を用いていたと考えられている。

今回、復元対象となっている御橋廊下周辺の二の丸・西の丸に関する略年表は、第１表のとおり

である。御橋廊下の創建年代については明らかでないが、『和歌山御城内惣御絵図』に描かれている18世紀末にはすでに存在し、明治初期までは架けられていたことが確認されている。

【参考文献】
『和歌山市史』第１巻　和歌山市　1991年
『和歌山市史』第２巻　和歌山市　1991年
三尾功『近世都市和歌山の研究』　思文閣出版　1994年

第1表　御橋廊下周辺の略年表

和　暦	西　暦	内　　容
元和５年	1619	徳川頼宣、紀州へ入国する
同　７年	1921	頼宣、城の大改修を開始、二の丸拡張
明暦元年	1655	「明暦の大火」により西の丸、二の丸が類焼する
宝暦５年	1755	石垣修理（西ノ御丸より南ノ方内曲輪御堀石垣壱ケ所、宝暦８年に修理できる）
寛永９～11年	1797～99	「和歌山御城内惣御絵図」が描かれる
文化10年	1813	大奥焼失する
明治２年	1869	版籍奉還
明治３年	1870	『南紀徳川氏』第17冊に御橋廊下の記述

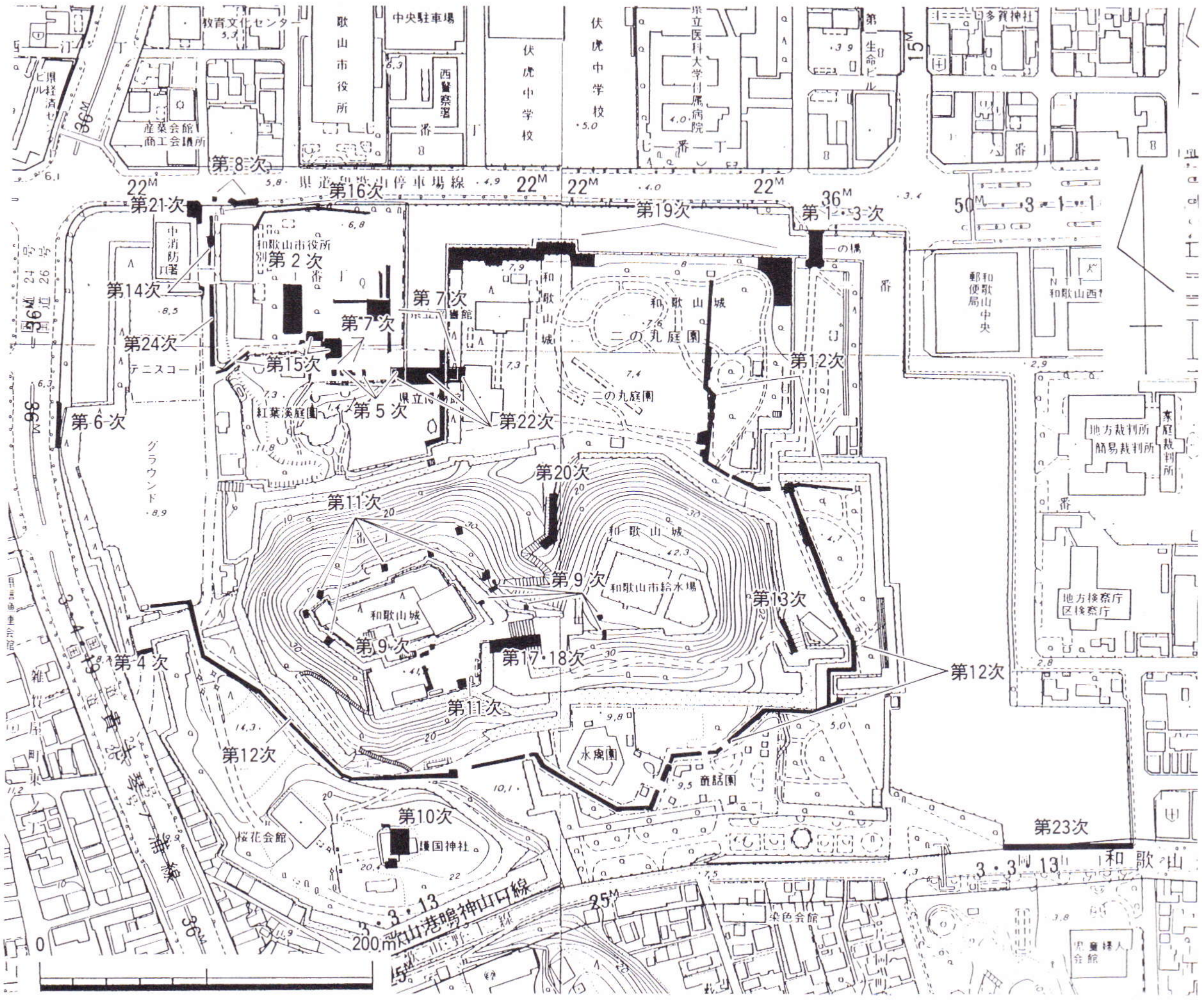
番号	遺　跡　名	時　代	番号	遺　跡　名	時　代	番号	遺　跡　名	時　代
1	史跡和歌山城	近世	13	秋月遺跡	弥生～近世	25	津秦遺跡	弥生
2	和歌山城跡	近世	14	鳴神Ⅵ遺跡	弥生～江戸	26	津秦Ⅱ遺跡	弥生～奈良
3	岡山の時鐘堂	近世	15	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～平安	27	大日山Ⅰ遺跡	古墳～奈良
4	鷺ノ森遺跡	弥生～近世	16	鳴神Ⅳ遺跡	弥生～江戸	28	井辺Ⅰ遺跡	弥生～古墳
5	本願寺跡	中世～近世	17	鳴神Ⅲ遺跡		29	井辺Ⅱ遺跡	弥生～古墳
6	山吹丁遺跡		18	鳴神Ⅱ遺跡	弥生～平安	30	井辺遺跡	弥生
7	友田町遺跡	弥生～平安	19	鳴神貝塚	縄文～弥生	31	井辺Ⅲ遺跡	縄文
8	吉田窯跡		20	音浦遺跡	古墳	32	岡崎縄文遺跡	縄文
9	木広町遺跡	弥生	21	花山古墳群	古墳	33	井辺前山古墳群	古墳
10	太田・黒田遺跡	弥生～近世	22	岩橋Ⅲ遺跡		34	森小手穂遺跡	古墳～中世
11	太田城跡	安土・桃山	23	岩橋千塚古墳群	古墳	35	神前遺跡	弥生
12	太田城水攻め堤跡	戦国～江戸	24	寺内古墳群	古墳	36	神前Ⅱ遺跡	古墳～室町

第２図　史跡和歌山城周辺の遺跡分布図

3．既往の調査

和歌山城の調査はこれまでに24回を数える。それぞれの調査位置は第３図に、調査の内容は第２表に示したが、第23次調査までの調査概要は既発行の年報１～７及び概報（第12・19・22・23次調査）に記載している。ここでは、今次調査の直前に行った第24次調査の概要を説明する。

第24次調査は配管設置工事に伴うもので、調査は御勘定門跡周辺から幅１ｍで南に約55ｍ掘削した部分のうち、約45ｍ地点で２ｍ分（A地点）と御勘定門跡周辺で８ｍ分（B地点）の計10㎡で遺構を検出した。A地点では東西方向の石組溝を確認した。溝は幅1.25ｍを測るもので、底石に結晶片岩の板石を敷き、縁石には砂岩の切石を用いたものであった。この石組溝は御勘定門跡から南に延びる道路を横断するものであり、石組溝を境に南側の路面が約40㎝高くなっていた。本来的にはこの溝には橋が架けられていたものと考えられる。B地点では南側から、結晶片岩板石敷、砂岩礎石、砂岩切石列（縁石）、結晶片岩礫敷などの遺構を確認した。特に、検出した砂岩礎石と砂岩切石列（縁石）は平成７年度に行われた第14次調査で検出された御勘定門のものとみられる砂岩礎石・砂岩切石と対をなすものであるとみられ、御勘定門の遺構の一部と考えられた。



第３図　第１～24次調査位置図

第２表　調査一覧表

次数	期　間	面積(㎡)	概　　要	原　因	調査主体	文献
1	1981年 10月～11月	72	大手門に関する２時期の遺構面を確認。大手門の礎石を検出。	一の橋大手門再建工事	和歌山市教育委員会	3
2	1982年 1月～３月	350	西の丸西側で２時期の遺構面を確認。建物の基礎石組、石組溝、土坑等を検出。	旧市庁舎跡地整備工事。	和歌山市教育委員会	3
3	1982年11月	40	一の橋が過去に２度の架換が行われていることを確認。	一の橋架換工事	和歌山市教育委員会	3
4	1984年 ２月～３月	60	追廻門礎石の確認調査。石組暗渠排水溝等を検出。	追廻門解体修理	和歌山市教育委員会	3
5	1985年 ８月～10月	72	西の丸側廊下橋取付部分で石垣裏込を確認。内部に焼成痕のある円形土坑を検出。	西の丸側廊下橋取付部分確認調査	和歌山市教育委員会	3
6	1986年12月 ～1987年３月	55	砂の丸から西に突出する石垣基底部を検出。	城北西部の地下ケーブル埋設工事	和歌山市教育委員会	3
7	1987年 １月～３月	480	西の丸東部で雨落溝・半地下通路・石組等を検出。	西の丸東部・二の丸側廊下橋取付部分確認調査	和歌山市教育委員会	3
8	1988年 １月～４月	60	城北西部の埋められた堀にかかわる石垣を検出。	城北西部のキャブシステム埋設工事	和歌山市教育委員会	3
9	1988年 10月～11月	47	天守閣と本丸周辺のグリッド及びトレンチ調査で石垣裾部を３ヶ所検出。	天守閣と本丸周辺の電柱移設とケーブル埋設工事	和歌山市文化体育振興事業団	1
10	1990年 ７月～８月	358	砂の丸南側の調査。江戸時代に遡る遺構は検出されなかった。	宗教法人和歌山護国神社社殿等の再建工事	和歌山市文化体育振興事業団	2
11	1990年12月 ～1991年１月	74	天守閣周辺でのトレンチ調査の結果、建物基壇、石組溝等を検出。	天守閣周辺の夜間照明設備改修工事	和歌山市文化体育振興事業団	2
12	1993年 ５月～10月	967	二の丸から表坂東側、中御門跡から砂の丸までトレンチ調査。石垣、石組溝、土坑等を検出。	城内における公衆トイレの水洗化に伴う工事	和歌山市文化体育振興事業団	3・4
13	1995年 １月～３月	100	表坂登り口付近の結晶片岩石垣基底部及び坂道の造成状況等を確認。	表坂入口付近の石垣改修工事	和歌山市文化体育振興事業団	5・7
14	1995年７月	30	勘定門に関する礎石、西外堀に関する石垣等を確認。	城北西部のキャブシステム埋設工事	和歌山市文化体育振興事業団	6
15	1996年 ５月～７月	80	西の丸跡南側の調査。３面の遺構面を確認し、石組暗渠溝等を検出。	西の丸跡内における便所棟建設工事	和歌山市文化体育振興事業団	9
16	1996年９月	40	西の丸北端部で石垣、石積み、石列等を検出。	防災無線ケーブル設置工事	和歌山市教育委員会	9
17	1996年11月 ～1997年３月	180	天守一の門櫓台結晶片岩石垣の構築状況、周辺坂道の造成状況などを確認。	天守一の門櫓台の石垣改修	和歌山市文化体育振興事業団	7・9
18	1998年 １月～３月	60	天守一の門櫓台結晶片岩石垣の裏込構造を確認した。	〃	和歌山市文化体育振興事業団	7・9
19	1998年 ７月～12月	1000	二の丸北縁部櫓台上で礎石、塼敷等を検出。二の丸櫓台石垣の構造等を確認。	二の丸跡整備事業	和歌山市文化体育振興事業団	8
20	1998年11月 ～1999年１月	110	裏坂登り口の結晶片岩石垣の構造等を確認。	裏坂下東石垣改修	和歌山市文化体育振興事業団	7
21	1999年 ９月～10月	20	西外堀に関する石垣を検出。	歩道拡張工事	和歌山市教育委員会	12
22	1999年12月 ～2000年３月	500	二の丸西側堀内において御橋廊下の橋脚遺構を検出。周辺の石垣構築状況を確認。	二の丸庭園西側堀の浚渫工事	和歌山市文化体育振興事業団	10
23	2001年 ２月～３月	80	和歌山城南東部堀の石垣構築状況を確認。	東堀石垣改修工事	和歌山市文化体育振興事業団	11
24	2001年７月	10	御勘定門に関わる礎石・石敷、石組溝を検出。	浄化ポンプ用配管設置工事	和歌山市教育委員会	

【参考文献】

1 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』１㈶和歌山市文化体育振興事業団　1992年

2 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』２㈶和歌山市文化体育振興事業団　1994年

3 『史跡和歌山城 第12次発掘調査概要報告書』㈶和歌山市文化体育振興事業団　1994年

4 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』３㈶和歌山市文化体育振興事業団　1996年

5 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』４㈶和歌山市文化体育振興事業団　1997年

6 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』５㈶和歌山市文化体育振興事業団　1998年

7 『史跡和歌山城 石垣保存修理報告書』和歌山市産業部・和歌山城管理事務所　1999年

8 『史跡和歌山城 第19次発掘調査概報』㈶和歌山市文化体育振興事業団　1999年

9 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』６㈶和歌山市文化体育振興事業団　2000年

10 『史跡和歌山城 第22次発掘調査概報』㈶和歌山市文化体育振興事業団　2000年

11 『史跡和歌山城 第23次発掘調査概報』㈶和歌山市文化体育振興事業団　2001年

12 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』７㈶和歌山市文化体育振興事業団　2002年

4. 第25次調査

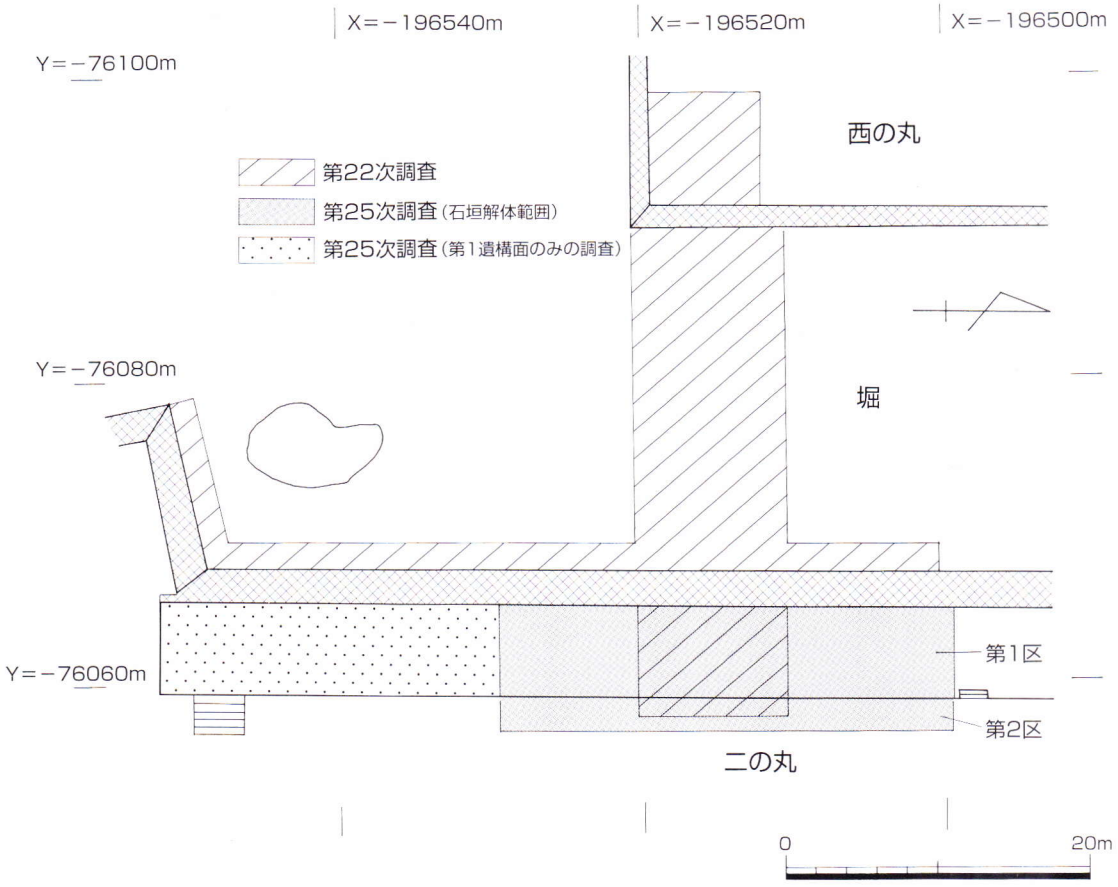
（1）調査の概要

［調査の方法］

調査区は二の丸石垣上部及び東側裾部に設定し、石垣上部を第1区、裾部を第2区とした。このうち調査区の範囲は、第1区が東西約6m、南北約55m、第2区が幅約2m、長さ約30mであり、以上の合計調査面積は約390㎡である（第4図）。第1遺構面までは遺構確認のため全面調査を行ったが、第3層以下は石垣解体範囲についてのみ行った。

発掘調査は、全ての掘削を人力によって行った。掘削にあたっては、第1区中央を縦断する国土座標軸のラインを設定した後、座標の整数値にあった測量杭を4m毎に設置し、この杭を基準に土層観察用のセクションベルトを設けた。遺物の取り上げについても、測量杭を基準として4mメッシュの単位で取り上げを行った。

また記録保存の方法としては、平面実測図及び石垣立面図は1/20の縮尺で写真測量によって作図し、一部の平面実測図及び、土層断面図、石垣断面図については同一の縮尺で手実測を行った。なお土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』を用い、遺跡の水準は国家水準点（T.P.+値）を基準とした。

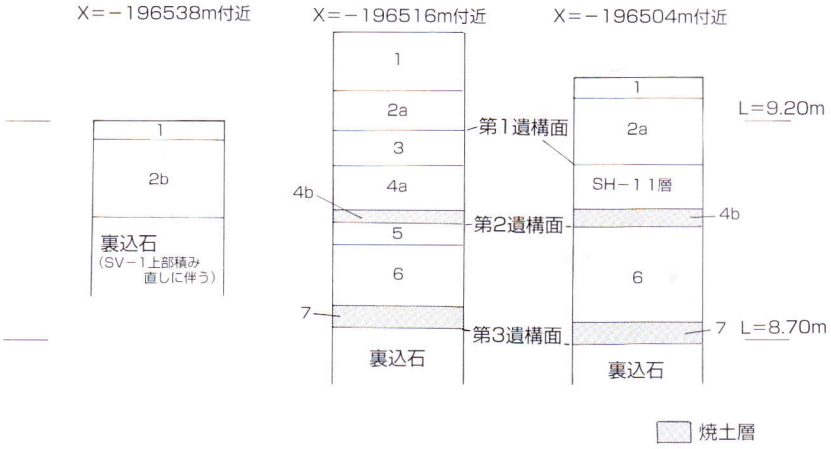


第4図　調査地区割図

［基本層序］

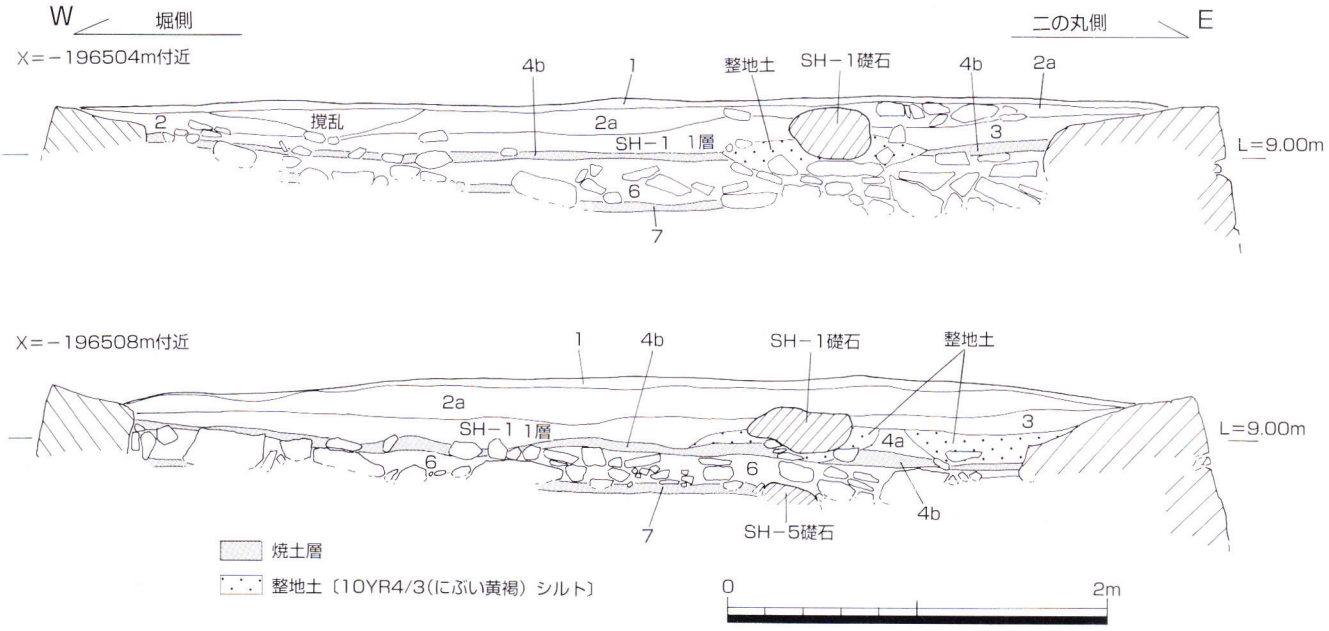
石垣上面は部分的に陥没した箇所があり高さが均一ではないが、第１区の基本的な土層の堆積状況としてはおおむね第５図のとおりである。また、調査地北側の土層断面図を第６図に示した。

まず現地表（第１層）の下に近・現代の整地土（第２層）が約25㎝堆積している。第２層は場所により土質が異なるが調査区全面に堆積している。その下面において第１遺構面の遺構を検出した。第３層は第１遺構面の多聞櫓外側、御橋廊下庇柱礎石周辺にみられるもので、砂岩円礫を上部に多く含む。第4a層は整地土で約10㎝の厚みを持つ。第4b層は焼土層である。第２遺構面の遺構はこの焼土層の下面において検出した。第５層は御橋廊下周辺でのみ確認している良く締まった粘質土で、二の丸側石垣の石尻部分で確認している塀はこの段階で敷かれたものとみられる。塀は第２遺構面の御橋廊下関連礎石の周辺で多く出土していることや第４・５層で多く出土していることを勘案すると、第２遺構面の段階で塀による床面整備が行われていた可能性が高い。第６層は結晶片岩礫を多く含む整地土、第７層は赤褐色の焼土



1　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂
2a　2.5Y5/4（黄褐）粗砂
2b　10YR3/2（黒褐）シルト
3　7.5YR4/4（褐）粗砂（直径1㎝程度の円礫を含む）
4a　10YR4/4（褐）粗砂
（焼土）4b　2.5YR3/6（暗赤褐）粗砂（10YR2/1（黒）細砂を含む）
5　10YR4/2（灰黄褐）シルト（10YR6/1（褐灰）粘土をブロックで含む）
6　2.5Y4/2（暗灰黄）粗砂混シルト（直径10～20㎝程度の結晶片岩礫を含む）
（焼土）7　2.5Y4/8（赤褐）粗砂混シルト
SH-11層　10YR5/4（にぶい黄褐）シルト

第５図　第25次石垣上面土層柱状模式図



第６図　調査区北側土層断面図

である。第７層は第4b層と同じく火災によるものと考えられるが、その範囲は西側２／３までであり、東端では検出していない。第３遺構面はこの第７層の下面において検出した。以上の基本層序のうち焼土層を火災の記録と照合すると、第７層は明暦元（1655）年の火災、第4b層は幕末～明治の遺構面（第３層）の下層にみられることから文化十（1813）年の火災の可能性が考えられ、出土遺物からみてもこれに矛盾しないものと思われる。

なお、第22次調査でも同様に７層の基本層序を示したが、部分的な調査であったため今回の全体的な土層堆積状況をふまえて認識を改めることとなった。土層検討の結果、第22次調査に示した土層の内、第2d層が第３層、第３～５層は部分的にみられる整地土（第３'層）、第６層が第4a層、第７層が第4b層に対応することとなり、遺構についても新たに検出したものと合わせて評価を改めた。

第２区については、県立博物館構築・撤去に伴う整地土が石垣基底部まで存在しており、また石垣保護のためとみられるコンクリートが基底部前面に打設されている状況を確認した。従って二の丸遺構面の標高について、今回の調査成果から把握することはできなかった。

（２）遺構

調査の結果、第２・４・７層下面においてそれぞれ遺構を検出した（第１～３遺構面）。各遺構面の間には焼土層（第4b・７層）がみられ、層序の対応から第３遺構面は第７層火災時に焼失、第２遺構面は第７層の火災以降第4b層の火災以前に存在、第１遺構面は第4b層の火災後に再建されたと推定できる。これらの焼土層を火災の記録に当てはめて考えるならば、第７層は明暦元（1655）年の火災と想定することができ、第4b層は幕末～明治の第１遺構面の下層にみられることから文化十（1813）年の火災の可能性が考えられる。

以下、遺構面ごとに主要な遺構について記述を行う。

第１遺構面検出遺構

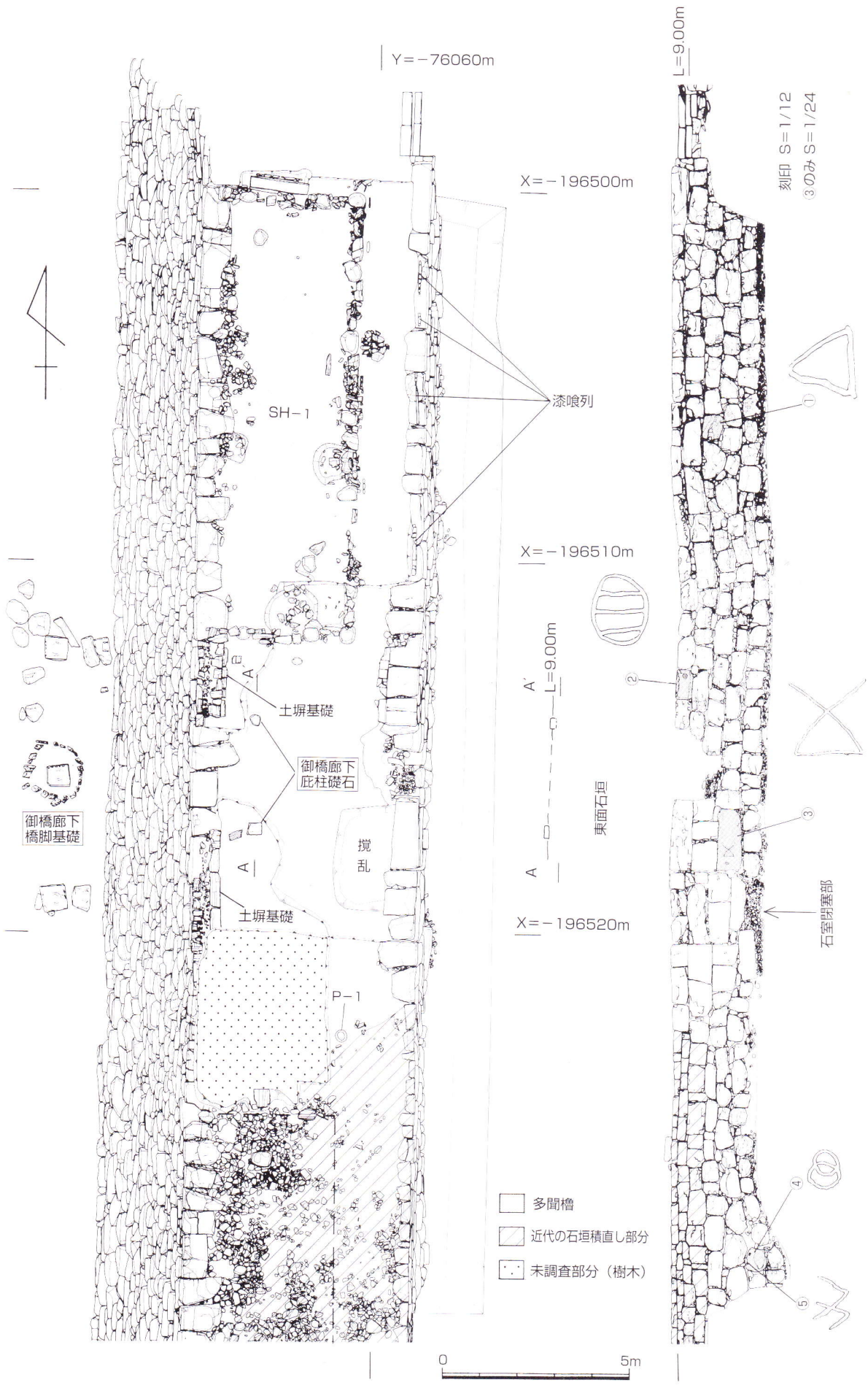
第１遺構面の検出遺構としては御橋廊下庇柱礎石の他、多聞櫓（SH－１～３）、土塀基礎、漆喰列等がある。このうちSH－１～３は「和歌山御城内惣御絵図」に描かれている多聞櫓とほぼ同様の位置関係であることが確認できた（第７・８図）。以下にその概要を記す。

［御橋廊下庇柱礎石］

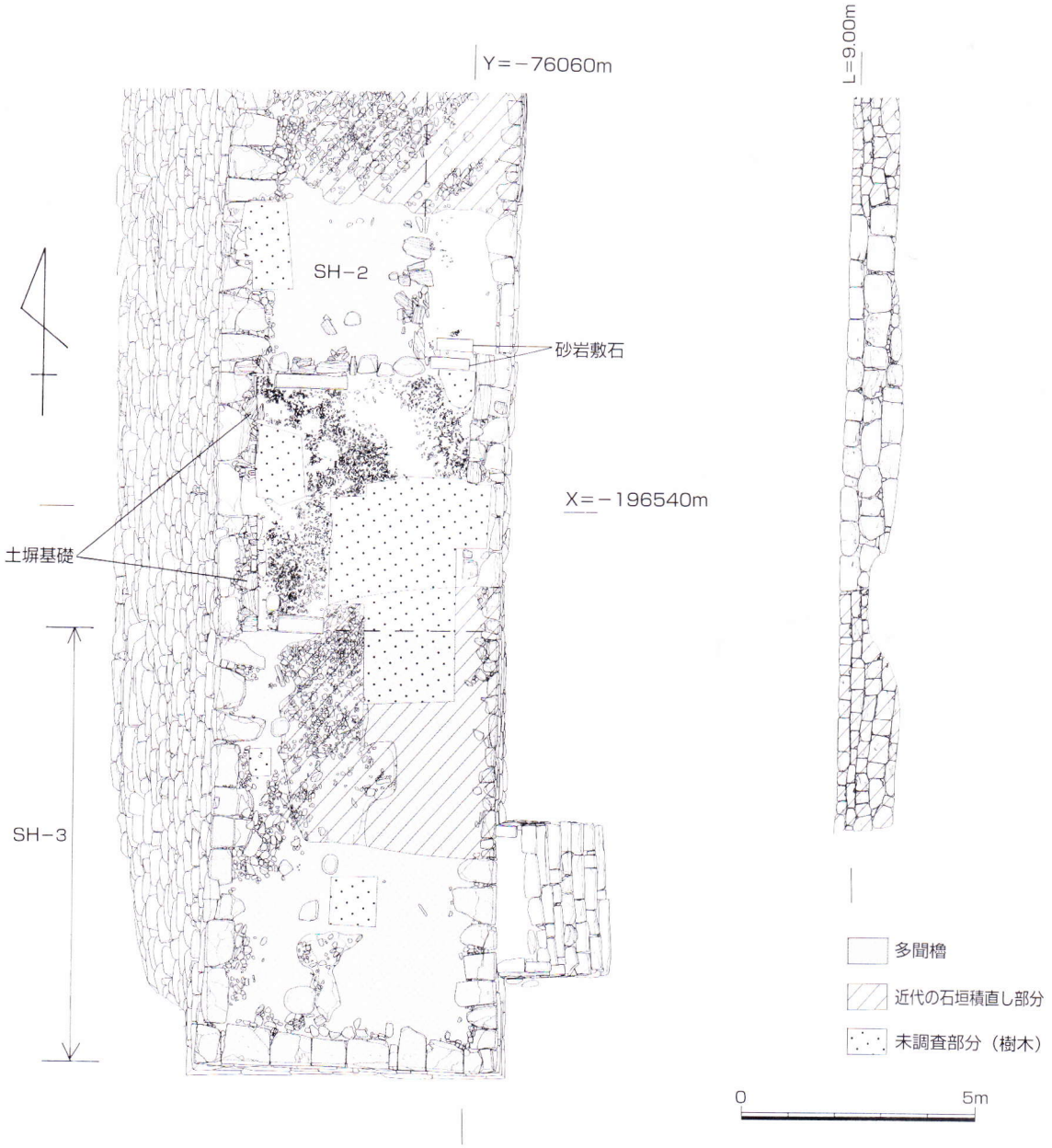
第22次調査で検出した花崗岩礎石（礎石１）に対応する礎石を、御橋廊下取り付き部南側において検出した。南側の庇柱礎石とみられ、石材は同じく花崗岩である。東西長約40㎝、南北長約32㎝、礎石上面の標高は9.39ｍを測る。厚さは15㎝程度であるが下部１／３は埋設されており、周囲の遺構面（約9.3ｍ）からの高さは10㎝程度である。北側礎石との中心部間の距離は約2.9ｍを測る。

［SH－１］

調査区北側において検出した多聞櫓の礎石列でほぼ１棟分を検出した（第９図）。南北長約12ｍ、幅４ｍを測る６間×２間の建物である。長径40～70㎝の砂岩礎石が約２ｍ間隔にみられ、礎石間には結晶片岩の割石を配置している。南北両側の礎石配置は中央１間左右半間ずつとなっており、北側の中央部には柱状に加工した砂岩を踏み石として据えている。内部床面は黄褐色シルト（SH－１第１層）が全面にみられ、土間であったと考えられる。しかしこのSH－１第１層掘削後の下面で第４



第７図　第１遺構面平面図及び石垣立面図（御橋廊下周辺）



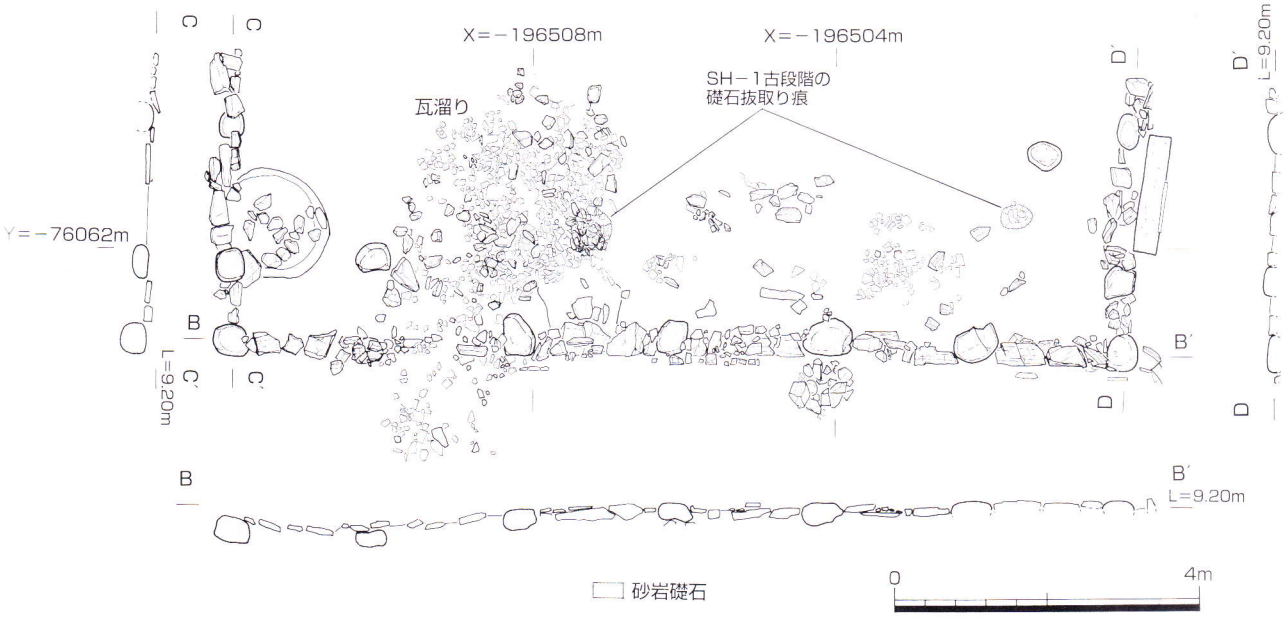
第８図　第１遺構面平面図及び石垣立面図（南端部）

ｂ層を切り込む形で礎石の抜き取り痕を確認したことから、以前は束柱を用いる板張りの床面であったとみられ、後になって土間に変更したものと考えられる。多聞櫓廃棄後、上部には瓦等が多量に堆積するが、その時期は共に出土した陶磁器からみて幕末から明治ごろと思われる。また礎石列外側では壁面の抑えに関係するとみられる漆喰を検出した。

砂岩礎石の取り上げに際して断割り調査を行ったところ、礎石下部には根固めとして結晶片岩が円形に組まれており、周囲は結晶片岩混じりの黄褐色シルトで突き固めた状況であった（図版４）。

［SH－２］

調査区南側において検出した礎石列である。北側２／３は近代以降の石垣の積み直しによりそのほとんどが失われているが、残された礎石や構造からみてSH－１と同様の建物であったとみられる。踏石とみられる柱状に加工された砂岩は南側に据えている。内部床面はSH－１同様黄褐色のシルトである。その他、建物南東側の通路にあたる部分で砂岩敷石やそれに付随する石列（土塀基礎か）



第９図　ＳＨ－１平面図及び断面図

がみられた。

［SH－３］

調査区南端部に位置する。柱状砂岩の踏石が北側にみられるが、明確な礎石は残されていない。

［土塀基礎］

堀側石垣端部にみられる基礎石組で、前回確認した御橋廊下取付部分周辺に加え、SH－２・３の間においても新たに検出した。東西両面に面を持っており、結晶片岩を２段に積んで構築している。基礎の幅は約60㎝である。

［漆喰列］

二の丸側石垣の天端において検出した。幅５㎝前後で部分的に残存している。この位置に塀状の構造物が存在していたとみられ、漆喰はその基底部分の根固め及び化粧の目的で用いられたものと考えられる。

［P－１］

御橋廊下取付部南側で検出したピットで直径約20㎝を測る。内壁を漆喰で固めておりその厚さは５㎝程度であった。内部からは褐釉徳利が出土しているが、その用途は不明である。

第２遺構面検出遺構

第２遺構面では御橋廊下関連礎石の他、塹敷遺構、SH－４等を検出している（第10図）。

［御橋廊下関連礎石］

御橋廊下取り付き部分で確認した砂岩礎石で、御橋廊下に関連するものとみられる。礎石中央部間の距離は約２ｍを測る。第７層に対応する焼土を切り込む形で据えている。北側礎石は南北長約70㎝、東西長約35㎝、礎石上面の標高は8.94ｍ、南側礎石は一辺約50㎝、礎石上面の標高は9.04ｍを測る。礎石上部には一辺約18㎝を測る角柱の痕跡が確認できる。

［塼敷遺構］

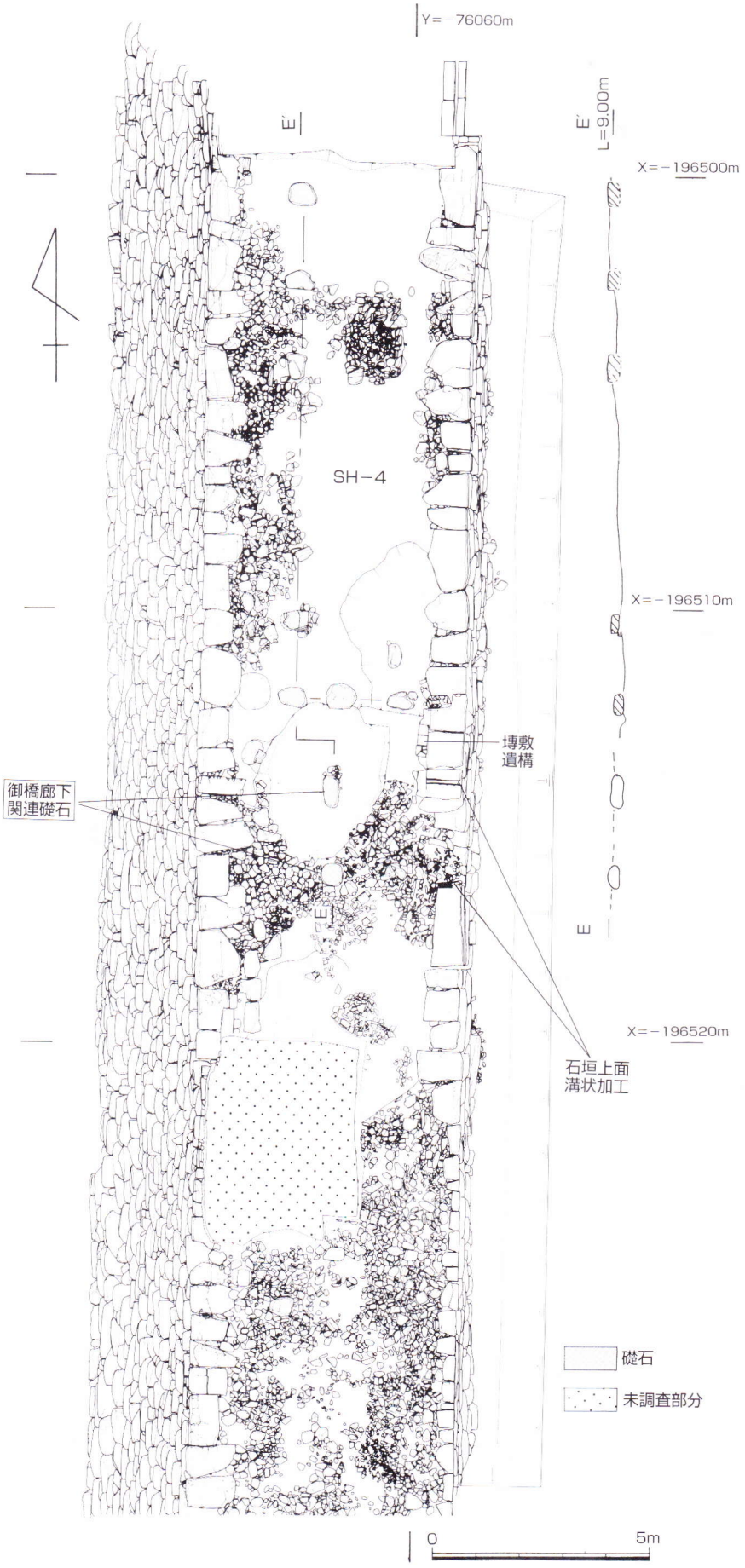
第22次調査時に確認されている遺構である。二の丸側石垣最上部の石材石尻部分に瓦製の塼三枚が敷かれていたもので、石垣石材は塼を並べられるように加工が施されている。塼の大きさは一辺23㎝、厚さ３㎝を測る。現位置を留めるものは３点のみだが、御橋廊下関連礎石の周辺で多く出土していることや第４・５層で多く出土していることを勘案すると、礎石周辺は塼による床面整備が行われていたとみられる。

［石垣上面溝状加工］

第７・22次調査時に検出されている加工痕である。二の丸側石垣上面に２カ所対になってみられるもので幅５㎝、深さ２～５㎝の溝を東西方向に彫り込むものである。溝の間隔は約2.4mを測る。第２遺構面の御橋廊下関連礎石から約20㎝ずつ外側へほぼ均等に配される位置関係から、これらの礎石と対応するものと考えられる。

［SH－４］

第22次調査時に確認した礎石５・６を含む多聞櫓の礎石列で合計８基検出した。礎石には長径60～70㎝の砂岩を用いており、その全てが被熱している。南北の礎石間の距離は２m前後である。南端部は礎石が３基並ぶが、その間隔は西から1.2m、1.4mと一定でない。第4b層の火災時に倒壊したものと思われる。



第10図　第２遺構面平面図

第３遺構面検出遺構

第３遺構面では御橋廊下関連礎石の他、SH－５、石室（いしむろ）を検出した（第11図）。

［御橋廊下関連礎石］

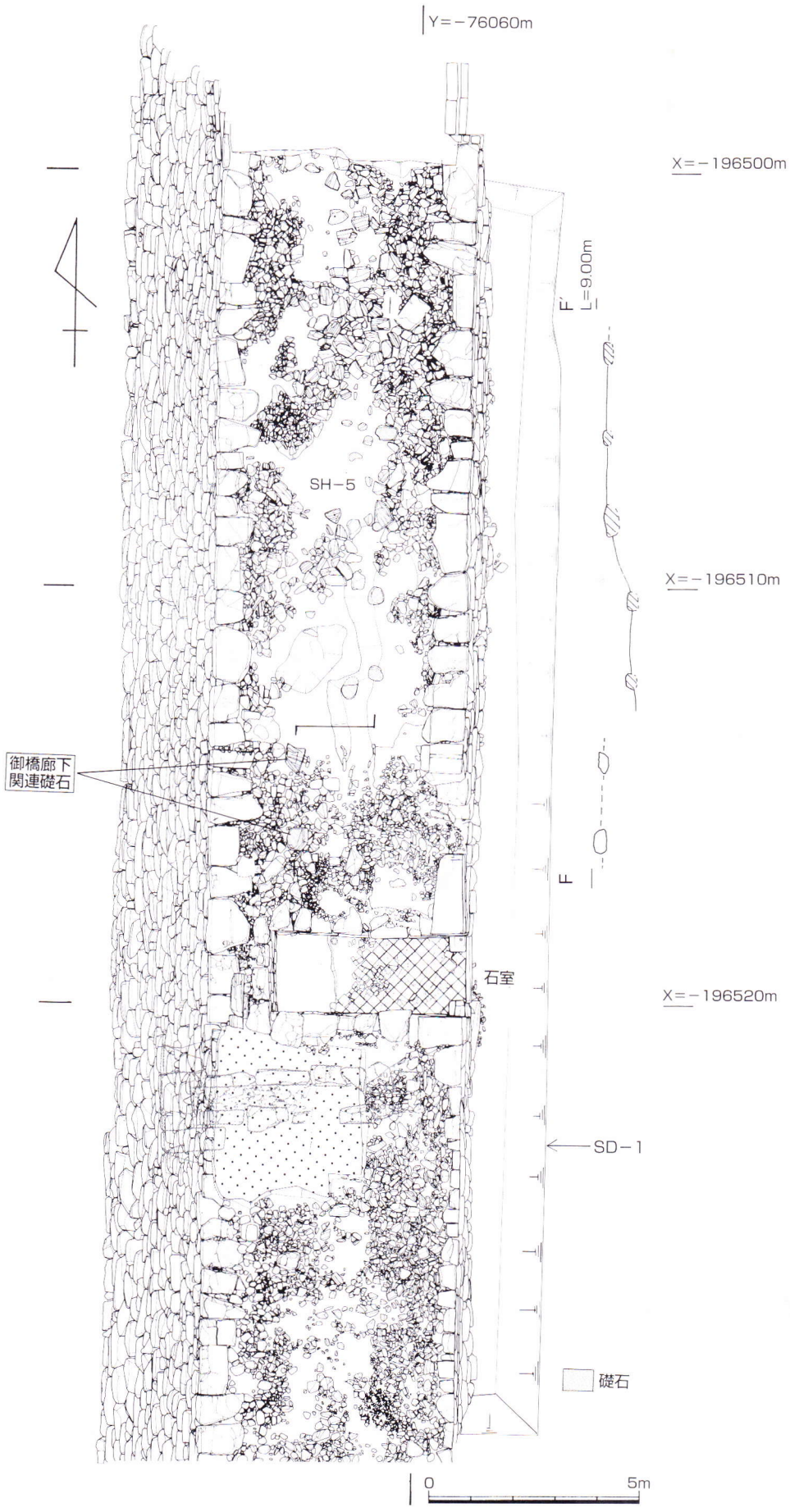
第２遺構面の礎石より約１ｍ西側で検出した。石材は北側が結晶片岩、南側が砂岩であるが、検出位置や石材間の距離が約２ｍを測る点を勘案して、御橋廊下に関わる礎石と判断した。ともに長さ60㎝程度を測る。第２遺構面の礎石は設置の際のホリカタが第７層を切り込んでいるのに対して、本礎石は第７層の切り込みがみられず、明暦の火災前に据えられた可能性が高い。

［SH－５］

SH－４の下層において検出した礎石列で合計６基確認した。礎石間の距離は約２ｍを測る。西側にも礎石列が存在したとみられるがその痕跡は確認できなかった。礎石石材は砂岩が中心であるが結晶片岩の礎石も１基みられる。礎石の長径は40～60㎝を測る。

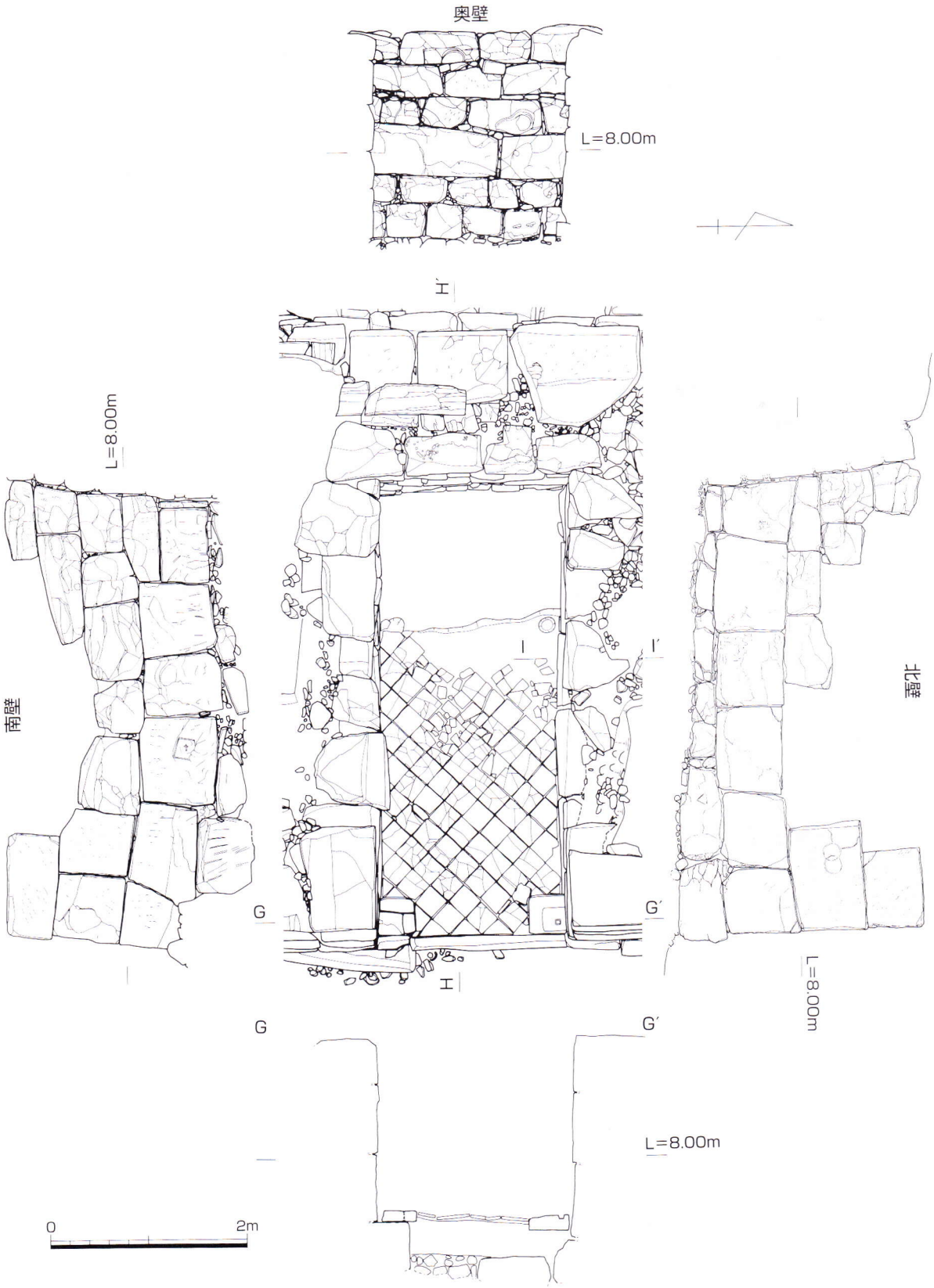
［石室］

御橋廊下取り付き部の南側で石室を検出した（第12・13図）。二の丸櫓

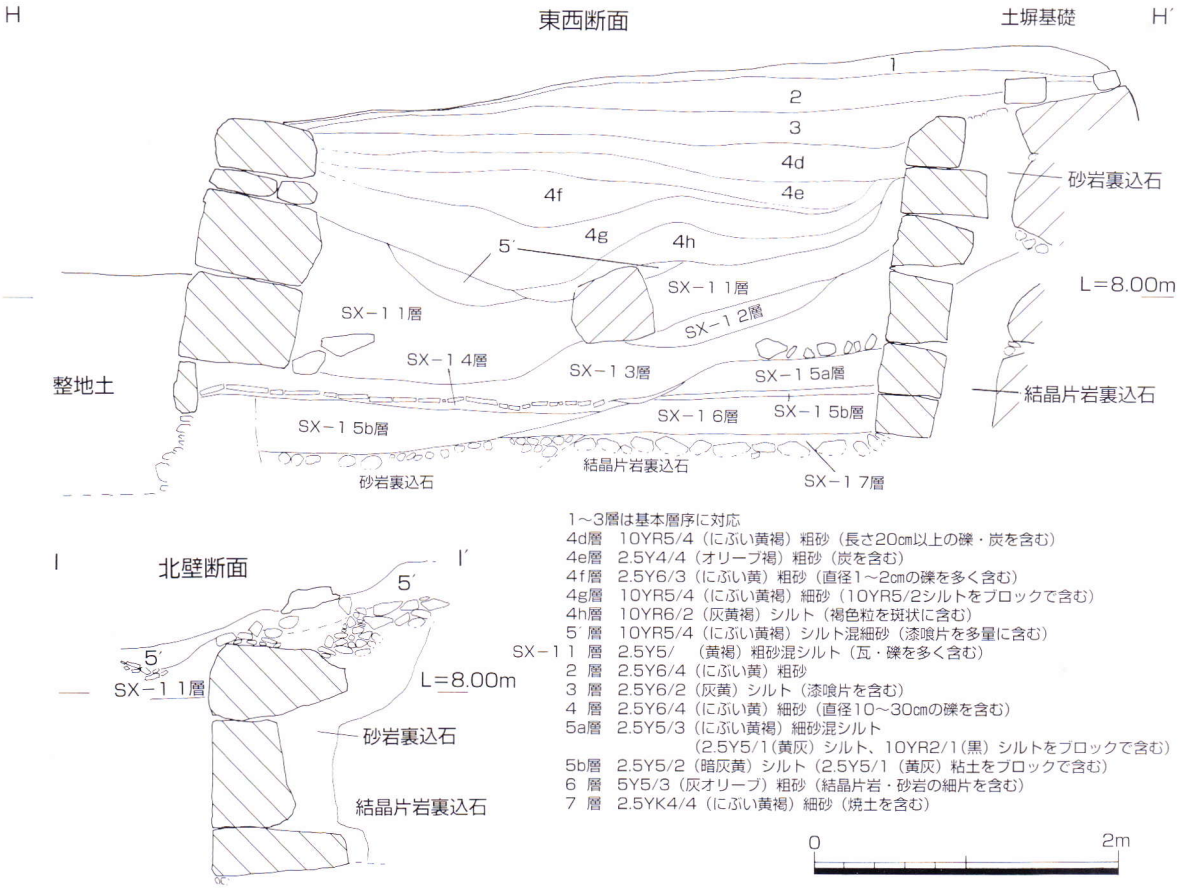


第11図　第３遺構面平面図

台石垣に組み込まれた形で構築された施設で、石垣東面開口部隅角部は算木積みで二の丸側石垣と一連のものである。検出時には入口は閉塞されており、側壁中央の上部は失われ石材の一部は石室



第12図　ＳＸ－１平面図及び立面図



第13図　ＳＸ－１断面図

内に転落していた。石室内部は奥壁について、基底部幅1.95m、上端部幅2.20m、高さ2.1mを測り、側壁については北側は基底部幅4.6m、上端部幅4.8m、高さ2.5m、南側は基底部幅4.6m、上端部幅4.7m、高さ2.5mを測る。壁面の勾配について、奥壁は82°、北側壁は87°、南側壁は90°を測る。石材は二の丸櫓台石垣と同じく砂岩を用いたものである。

入口部分には板状の石材が敷居に用いられ、敷居上面は内部床面より15〜20cm高い位置に据えられている。その内側両端には扉に関係するものとみられる礎石がある。礎石は一辺約40cm、厚さ約15cmを測るもので、南側のものは３つに割れている。上面の壁際に一辺約５cmの方形の枘穴を持つもので、礎石と敷居石との位置関係から、扉は内開きであったものと考えられる。

床面では入口側約２／３の範囲で瓦製の塼敷を検出した。塼敷は石室の主軸方向に対して約45度で塼を敷く、いわゆる四半敷であった。検出した瓦製塼は95枚で、本来敷かれていたとみられる部分を復原すると計113枚使用されていたと考えられる。塼の法量はほぼ一定であり、その平均値は一辺23cm、厚さ３cm、重量2.8kgを測る。奥側１／３については、床面に相当するシルト層を２面確認した（SX－１第5a・5b層各上面）。SX－１第5b層上面は石室構築当初の床と考えられ、四半敷とほぼ同一レベルで存在する。SX－１第5a層は床を一段高くするための盛土とみられ、この部分は土壇状となる。土壇部分の上面は熱を受け赤変していた。また四半敷の西端部、土壇裾には直径約20cm、深さ約５cmのピットが左右両壁端にみられ、ピット内には焼土が堆積していた。これらのピットから、棚などの簡易なものを支える柱が存在した可能性が考えられる。

SX－１第5a層及び四半敷上面にはSX－１第３層が堆積しており、この層を含むSX－１第３・２・

1・1′層が石室廃絶時の埋め立てによる堆積層とみられる。これらの層からは、肥前系京焼風陶器、京・信楽系陶器、瓦製塼、平瓦、丸瓦、桟瓦、鉄製鎹・釘などが出土した。なお、これらの層より上位に堆積した第5′層及び第4層であるが、出土遺物及び周辺の土層堆積状況との対応関係から江戸時代後期以降のものである。閉塞した上位二段分の石材についても据え直した形跡がみられる。また、一段目と二段目の間から出土した遺物からみて、上位一段目の石材はさらに近代以降に据え直したものと考えられる。

石室の石材について、奥壁は平均幅約40㎝、高さ約30㎝の砂岩が6段で積まれており、その奥壁面に接して左右の側壁が構築される。側壁石材は奥壁のものより大きく、基底部分では幅80～90㎝、高さ70㎝程度のものが使用される。石材は丁寧に加工されたものが多く、刻印を南北壁面に各2箇所、合わせて石室内壁面に4箇所確認した。

SX－1第5a層上面では焼土がみられ、それより上部の側壁・奥壁及び四半敷面の一部は赤変していた。おそらく、火災による熱を受けたものとみられ、その後開口部の閉塞、石室の埋め立てが行われたと考えられる。また閉塞部分は4段で砂岩石材を用いているが、一部に熱を受け赤変したと考えられる石材が存在する。側壁石材の数が足らないことを勘案すると、閉塞する際に石室側壁上部石組を石材として転用した可能性が高い。

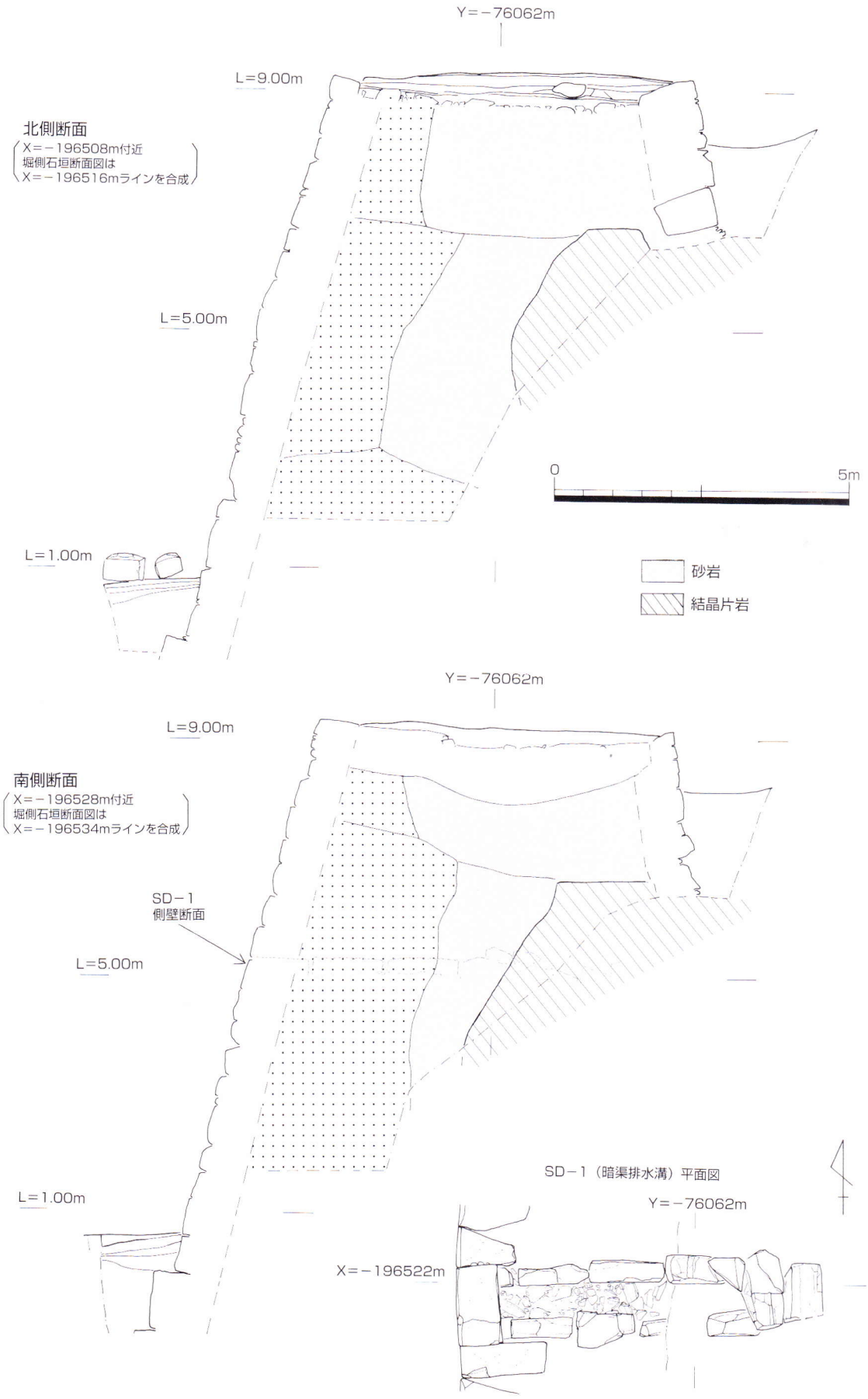
石室の構造や基底部の状況を把握するために、壁面裾部においてサブトレンチを設定、掘削を行った。その結果、石室内部では基底部までに7層の堆積を確認することができた。奥壁基底部では石室第7層に焼土が含まれていたが、周辺の石材及び下層の裏込石に熱を受け赤変した様子は伺えなかった。また石垣解体時に石室の断割調査を行ったところ、石室の裏込石に直径10～20㎝の砂岩円礫と長さ20～70㎝の結晶片岩割石の2種類が存在することを明らかにした。砂岩円礫は石室裏込の大部分を占めており、解体前に平面的にみると石室を取り囲むように砂岩円礫を確認していた。それに対して結晶片岩割石は奥壁と石室基底部西半分で検出したものである。石室奥壁と堀側石垣の断面観察では、結晶片岩割石を奥壁の下半分において確認しているが、全てが結晶片岩ではなく堀側石垣石尻部分には砂岩円礫もみられた。

また、石室入口部分の隅角部石垣二の丸側前面下部の左右隅石の対になるとみられる位置に枘穴が1箇所ずつみられ、これも石室の上屋構造等に関係するものと考えられた。なお、石室入口部分の隅角部石垣であるが、二の丸側における周辺石垣隅角部の規模を勘案すると石室規模に対して非常に大規模なものであり、当初から用意されたものではなく二の丸拡張前に存在した旧石垣石材を転用した可能性があると考えられる。

二の丸櫓台石垣

［石垣改修の状況］

堀側の石垣については、上面調査で石垣際まで第7層を確認していることから、積み直しが行われた可能性は低いとみられる。反対に二ノ丸側の東面石垣周辺では第4b層は認められるが、第7層は確認できず、第7層の火災後に上部1・2段を積み直したものと考えられる。また石室の南側一帯には長方形の切石の砂岩で改修された部分があるが、これは改修部分に対応する上部の遺構（第1遺構面）が失われている状況から、幕末以降に行われたものと考えられる（第7・8図）。



第14図　石垣断面図及びＳＤ－１平面・断面図

［石垣解体時の調査］

石垣解体時の断面調査を行った結果、石垣裏込石は長さ10～50㎝の結晶片岩割石と直径10～40㎝の砂岩円礫の２種類みられ、堀側石垣石尻から約2.5ｍの範囲には主として砂岩円礫を、それよりも東側には結晶片岩割石を主に使用していた。二の丸石垣と両側から立ち上がる櫓台部分では、結晶片岩の割合が多くなるが、その場合でも堀側石垣石尻には砂岩円礫が確認できる。このような２種類の石材を裏込石として用いる事例は、和歌山城の調査では今回はじめて確認されたものであるが、石材を使い分ける理由の一つには、結晶片岩を土留めとして用いた可能性が考えられる。以上のように、本石垣では構築する段階で同時に２種類の裏込石を使い分けていたことが明らかになった。なお、石室の裏込石についても２種類の石材が用いられるが、このような石垣裏込石の状況を勘案すると裏込石の違いが必ずしも時期差や構築の前後差を示すものとはいえず、むしろ同一時期の行程差であるとみるのが妥当ではないかと考える。

その他、二の丸側石垣基底石について、下面に胴木の使用は認められず、盛土の砂層に結晶片岩の割石を敷きその上に据えている状況を確認した。

［SD－１（暗渠排水溝）］

標高５ｍ付近で検出した石組みの暗渠排水溝で、平面的には石室の南に位置する（第11・14図）。石材には主として砂岩が使用されるが、天井石には砂岩と結晶片岩が併用される。東西方向に延びるがやや東側が北に振っており、二の丸側石垣の直下付近でさらに北側に屈曲する。堀側石垣に開口部を持つもので、二の丸の排水を堀に注いでいたものとみられるが、機能しなくなった後に表面から２基の石材で閉塞していた。石垣中央部付近が陥没して石材が現位置を保っていないものが多いが、内部の広さはおそらく幅60㎝、高さ40㎝程度であったと推定できる。底部からは砂岩と結晶片岩の板状片が火を受けた状態で出土しており、排水構内面の石材も被熱している。遺物は堀側石垣表面から２ｍの範囲では確認できなかったが、石垣中央部付近では約１ｍの範囲内から土師器皿、肥前磁器碗、瀬戸美濃系天目茶碗、長さ８～14㎝の鉄釘21点と炭が出土した。溝の底部は先述のように礫敷でこのままでは溝としての機能を果たさないが、大型の鉄釘及び炭が出土したことや石垣内部の石材まで赤変していることなどから、石組の内部には木樋が存在した可能性が考えられ、火災時にこれが焼失したと推定できる。

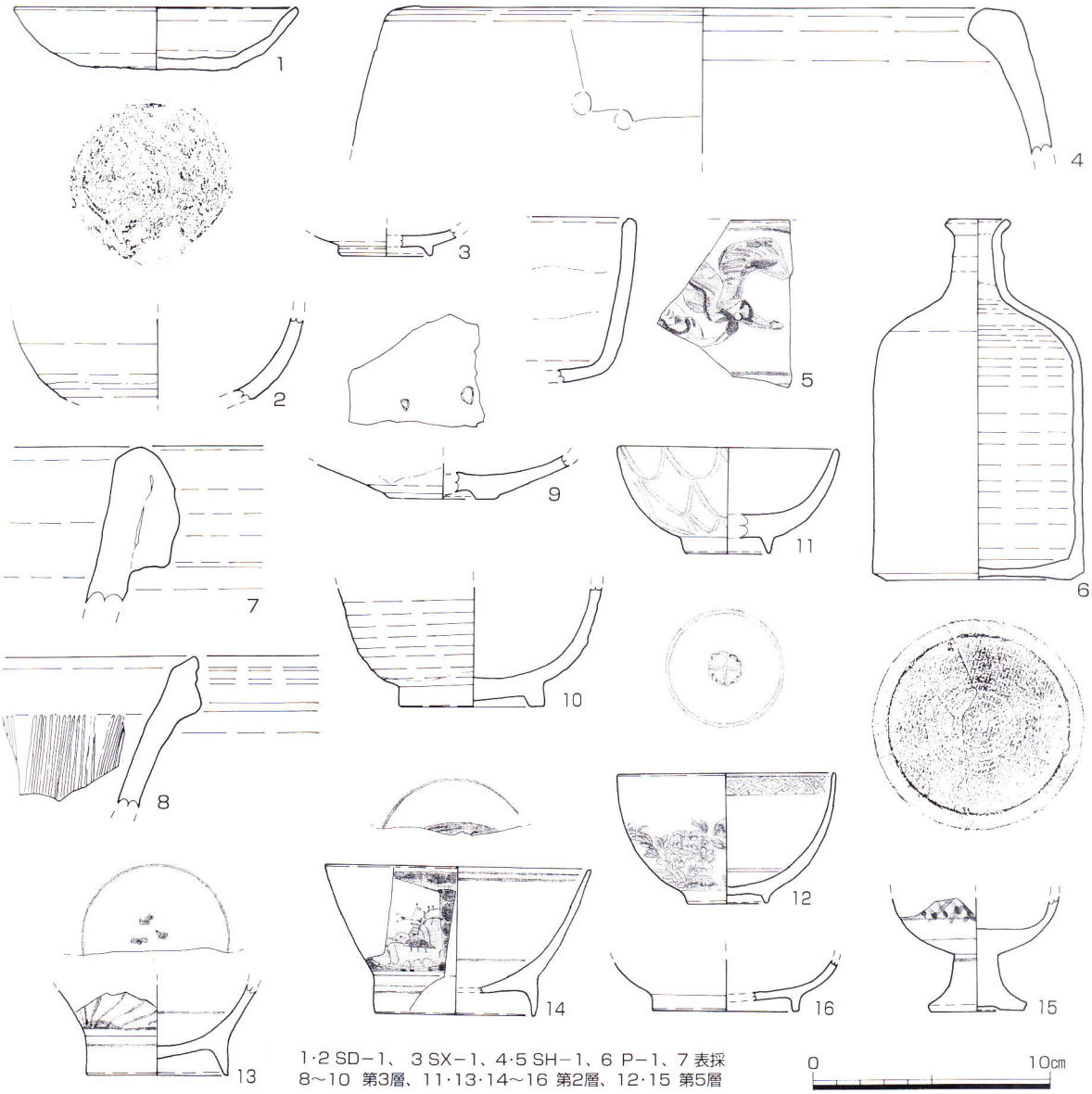
また、出土遺物の内土器類は二の丸から水路へ流出した可能性が考えられるが、年代的には３点とも17世紀前半のうちで収まるものである。このことから火災は三の丸武家屋敷から出火し西の丸と共に二の丸を焼失した明暦元（1655）年の火災時とみて大過ないと思われる。

（３）遺物

遺物は遺物収納箱（コンテナ）に360箱出土しており、その大半が丸･平瓦や桟瓦、塼等の瓦類である。瓦類以外では土師器、土師質・瓦質土器、国産陶磁器、焼塩壺、石器、石製品、鉄製釘を含む金属器、漆器椀、貝殻などの自然遺物が出土している。遺物は江戸時代のものが大半であるが、近現代の産地不明陶磁器の他、和歌山城築城以前の時期のものとして弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器等も少数ながら出土している。以下、それぞれ種別毎に項目を立てて記述する。

［土器・陶磁器］（第15図１～16、図版21）

土器・陶磁器について、まず遺構出土のものを説明する。１・２は石垣に組み込まれたSD－１（暗渠排水溝）出土のものである。１は土師器皿で、口径11.9cm、器高2.6cmを測り、底部に糸切り痕がみられる。２は瀬戸・美濃系褐釉天目茶碗である。３はSX－１（石室）出土の肥前系陶器椀の底部である。高台径3.6cm、残存高1.2cmを測り、細かな貫入が入るものである。黄褐色系の胎土に透明釉が施釉され、17世紀代のものとみられる。４・５はSH－１出土である。４は土師質土器の風炉である。口径24.0cm、残存高6.2cmを測る。外面には径８mmの円形の小孔がみられ、朱色に彩色されミガキが施されるものである。５は鉄絵の描かれた方形の陶器灰落しである。残存器高6.2cmを測るもので、口縁端部に釉薬の剥離が観察されるが、これはキセルを打ち付けたためと考えられる。６はP－１出土の褐釉徳利で、大谷焼と考えられるものである。口径2.4cm、底径7.6cm、器高5.2cmを測り、底部に回転ケズリ痕がみられる。



第15図　遺物実測図１

7～16は包含層出遺物である。7・8は備前焼であり、7は大甕の口縁部で、残存器高6.6cmを測る。8は擂鉢の口縁部で、残存器高6.4cmを測り、クシ目は1単位12条である。9は唐津焼の皿底部である。高台径4.4cm、残存器高1.5cmを測り、灰白色の釉を施釉したもので、見込み部には胎土目の跡がみられる。10は瀬戸・美濃系天目茶碗である。高台径6.2cm、残存器高5.1cmを測り、腰の張るものである。11～15は肥前系染付である。11・12は丸碗で、11は径9.2cm、高台径3.5cm、器高4.5cmを測り、外面には二重網目文が描かれている。12は口径9.2cm、高台径3.3cm、器高5.4cmを測り、外面に牡丹、口縁部内面には四方襷文、見込み部には二重圏線の中に十丁字文が描かれている。13・14は広東碗で、13は高台径6.0cm、残存器高3.9cmを測り、外面には半菊文が描かれている。14は口径11.2cm、高台径6.7cm、器高6.3cmを測り、外面には山水楼閣が描かれたものである。15の仏飯器は、口縁部が上方に延びるもので、外面には斜格子文が描かれている。高台径3.9cm、残存器高4.8cmを測る。16は緑釉を施釉した陶器皿で、高台径6.1cm、残存器高2.2cmを測る。珉平焼の可能性がある。

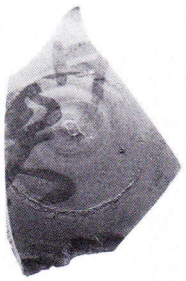


写真1　「中奥」銘の陶器

またこれらの他、墨書で「中奥」と記された不明陶器が、第2層から出土している（写真1）。

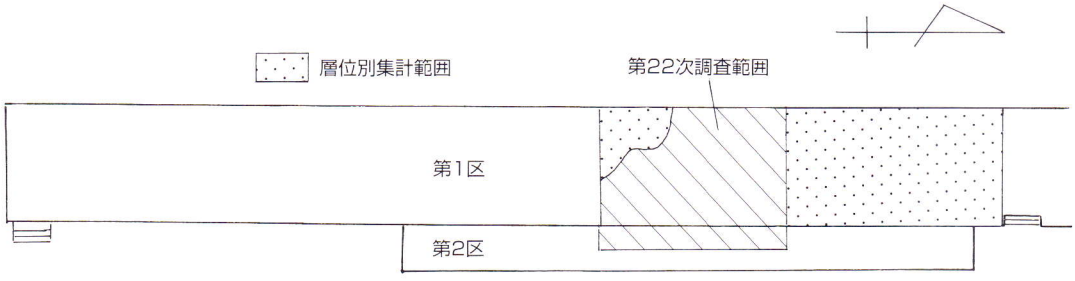
［瓦］

出土瓦の総量及び層位別の内訳は第3表のとおりである。層位毎の出土量については上層と下層で調査範囲が異なるため、以前の調査区・攪乱等を廃した範囲に限定して一覧表にした。量的にみると全体的に第1・2層からのものが多く、特に軒瓦にその傾向が強い。しかも下層の軒瓦は細片が多く、出土層位で前後関係を直接把握できる資料は少ないのが実際である。

第3表　出土瓦集計表

		軒丸瓦	軒平瓦	軒桟瓦	桟瓦Ⅰ	桟瓦Ⅱ	桟瓦Ⅲ	平瓦(kg)	丸瓦(kg)	面戸瓦	輪違い瓦	鬼瓦	板塀瓦	海鼠壁瓦	塼(長方形)	塼(kg)	不明瓦
調査地全体		125	149	46	638	64	24	2389	509	187	44	3	45	6	19	2612	51
層位別内訳	第1層	4	8	3	32	2	0	81	16	6	1	0	1	0	0	12	1
	第2層	15	29	7	66	9	0	256	53	35	2	0	3	0	0	16	1
	SH－1	*12*	*11*	*1*	*47*	*5*	*0*	*153*	*22*	*5*	*0*	*0*	*1*	*0*	*0*	*3*	*1*
	第3層	2	3	1	21	0	0	123	25	1	0	1	0	0	0	17	3
	第4層	9	9	4	34	0	5	142	36	5	0	0	1	1	6	212	3
	第5層	3	5	2	38	0	12	140	29	1	1	0	1	1	6	232	5
	第6層	0	2	0	3	0	1	141	36	0	0	1	0	0	0	17	0
	第7層	0	0	0	0	0	0	0.2	0.2	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	45	67	18	241	16	18	1036.11	217.28	53	4	2	7	2	12	508.94	14

※平瓦・丸瓦・塼は重量、その他は点数



ここでは種別ごとに分類を行い、その特徴や量的分布の把握に主眼をおくこととした。なお、軒瓦の分類とその基準については第４表に、各種瓦の写真は図版22～25に示した。

軒丸瓦（第16図17～22、図版22）

出土した軒丸瓦の文様は全て三つ巴文である。瓦当の離笵技法によりＡ・Ｂの２種類に大別し、文様構成により細分した。

Ａａ・Ａｂ類は巴の形状で分類したが、珠文の大きさや数、瓦当径などによりそれぞれ細分が可能である。図版19では代表的なものを示した。またＡｃ、Ｂｃ類は小型で数も比較的少ないことから、限られた部位に用いられたとみられる。出土層位はほとんどが第１・２層であるが、Ｂｂ類については第３・4b層でも確認している。

第４表　丸・平・桟瓦分類表

軒丸瓦

製作技法		文様構成		外径	内区径	珠文数	珠文径	出土点数
Ａ類	瓦当離笵－離れ砂 凹面の一部に内叩きが施される。	Aa	巴の尾が接し、圏線状を呈する。巴の形状、珠文数により細分可能。	15.5～17.5	11～13	13～16	0.9～1	10
		Ab	巴の尾が互いに接しない。	14.5～16	12	14～16	1～1.4	12
		Ac	巴の尾が互いに接しない。瓦当径が小さく、小型のもの。	12.5～13	9～10	12	0.9～1	7
Ｂ類	瓦当離笵－キラコ 凹面に内叩きが密に施される。	Ba	巴の尾が互いに接しない。	15.5	11	14	1.3	27
		Bb	巴の尾が互いに接しない。珠文がやや小さい。	15.0	11	14	1.0	7
		Bc	巴の尾が互いに接しない。瓦当径が小さく、小型。巴右巻（頭部→尾部）	10.4	7	11	0.6	1

不明　61

軒平瓦

製作技法		文様構成		瓦当上部幅	瓦当幅（上下）	平瓦部厚さ	脇区指数	出土点数
Ａ類	瓦当離笵ー離れ砂	Aa	中心飾りに蓮華。子葉は２回屈曲する。	26.0	4.6	1.7～1.8	0.39	10
		Ab	子葉に葉脈が表現されるもの。	25.0	5.1	1.7～1.9	0.37	6
Ｂ類	瓦当離笵ー キラコ	Ba	中心飾りに花弁。唐草、子葉の端部は肉厚で丸く収める。	24.0	4.3	1.6～1.7	0.39	18
		Bb	中心飾りに蓮華。子葉は緩やかに１回屈曲する。	24.2	4.7	1.6	0.36	1

※脇区指数…脇区長/中心から側端長

その他の文様
Ａ類　18
Ｂ類　12
不明　96

丸・平瓦

	丸　　瓦	平　　瓦
Ａ類	凸面にはミガキの単位が観察できる。凹面に内叩きを持たないものと粗く施すものの２種類ある。	凹面はヘラ状工具を用いた粗いミガキ。前後方向に反りがある。
Ｂ類	凸面は磨き粉を用いた丁寧なミガキを施す。凹面には内叩きを密に施す。	凹面は磨き粉を用いた丁寧なミガキを施す。

桟瓦関係

桟の形状		軒桟瓦（文様構成）		出土点数	桟瓦出土点数	面戸瓦	出土点数
Ⅰ類	通常の桟瓦（鎬桟瓦）	a	唐草は端部が肉厚で丸く収める。子葉は巻き込みが無く先端が尖る。	9	638	桟との対応部分を垂直に成形する。	18
		b	唐草・子葉を巻き込むもの。	5			
		c	子葉は横方向に屈曲する。中心飾り下端唐草は斜め下に屈曲する。	14			
		d	子葉は横方向に屈曲する。中心飾り下端唐草は横にまっすぐ伸びる。	7			
		e	中心飾りに三つ葉と点珠を７つ持つもの。巴を持つ。	2			
Ⅱ類	桟が丸く屈曲する丸桟瓦（御橋廊下関連の瓦）	右桟	建物からみて右に桟を持つもの。唐草端部は肉厚で丸く収める。	9	64（左右不明のものが多い）	桟との対応部分を弧状に成形する。	8
		左桟	建物からみて左に桟を持つもの。唐草端部は斜め上方へ細く伸びる。	0（27次で出土）			3
Ⅲ類	桟の屈曲がなだらかなもの			0	24	?	

軒平瓦（第16図23～26・31、図版23）

軒平瓦の文様は基本的に唐草文であるが数種類みられる。軒丸瓦と同様に瓦当の離笵技法で２種類に大別し、文様構成によりそれぞれ２種類に分類した。

Ｂｂ類はＡｂ類の系統の文様であるが、瓦当離笵にキラコを用いるものである。Ｂａ類は今回の資料の中で、技法的にも文様的にも最も新しいタイプのものである。その他、滴水瓦が２点出土しており、内１点は違い鷹羽文である。

丸・平瓦（第16図27～30、図版23）

丸・平瓦共に２種類に分類した。平瓦はミガキと形状を中心に大別したが、これらは厚さ1.8㎝のものが多い。瓦の厚さ規格からすると、さらに厚さ７分を指向したもの（厚さ約２㎝の一群）が存在する。丸瓦は破片を中心とした検討から、ナナメコビキ痕（コビキA）を持つもの、内叩き痕を持たないもの、内叩き痕を部分的に施すもの、内叩き痕を密に施すものの４種類確認できた。ナナメコビキ痕を持つものは時期的に調査地石垣成立以前のものと考えられる。６・７層を中心に被熱により赤変した状態で出土しているが、点数は破片で９点とわずかなことから、この一群は他で使用された瓦を部分的に転用したものとみられる。

以上の丸瓦は軒丸瓦との対応から、内叩き痕を持たないもしくは部分的に施すものをA類、内叩き痕を密に施すものをB類とした。大きくは軒瓦のA・B類にそれぞれ対応するものとみられる。

軒桟瓦（第17図32～38、図版24）

桟の形状から大きく２種類に分類した。Ⅰ類は通常みられるタイプの桟瓦（鎬桟瓦）で、平瓦部の唐草文様によりⅠａ類からⅠｅ類の５種類に細分できる。このうちⅠｂ～Ⅰｄ類は同系統の文様である。その他に１個体のみ確認している文様が10種類ほどあり、文様が部分的に異なる軒桟瓦が多く存在するようである。少数のものについては補修のさいに使われた可能性も考慮に入れておきたい。

Ⅱ類は、桟の部分が丸みを帯び端部が断面三角形状になるもので、和歌山で「丸桟瓦」と呼称される瓦である。丸桟瓦は、紀州湊御殿や重要文化財旧中筋家住宅とその周辺、その他有田・吉備地方にも散見されるが、本調査で確認した丸桟瓦は①端部の屈曲が著しい点、②左右両方の桟瓦が存在する点、③釘穴が斜め横方向に穿たれている点が特徴的なもので、御橋廊下の斜め屋根に使用された瓦と考えられる。左右両方存在するが、第25次で確認したものは右桟のみである。面戸瓦の出土量からもその傾向が読み取れる。出土層位は第１・２層が中心である。

以上の桟瓦の内、Ⅰａ類とⅡ類右桟は子葉端部の処理がわずかに異なる点以外は、文様構成が酷似する。Ⅰ類・Ⅱ類とも、瓦当離笵には全てキラコが使用されている。

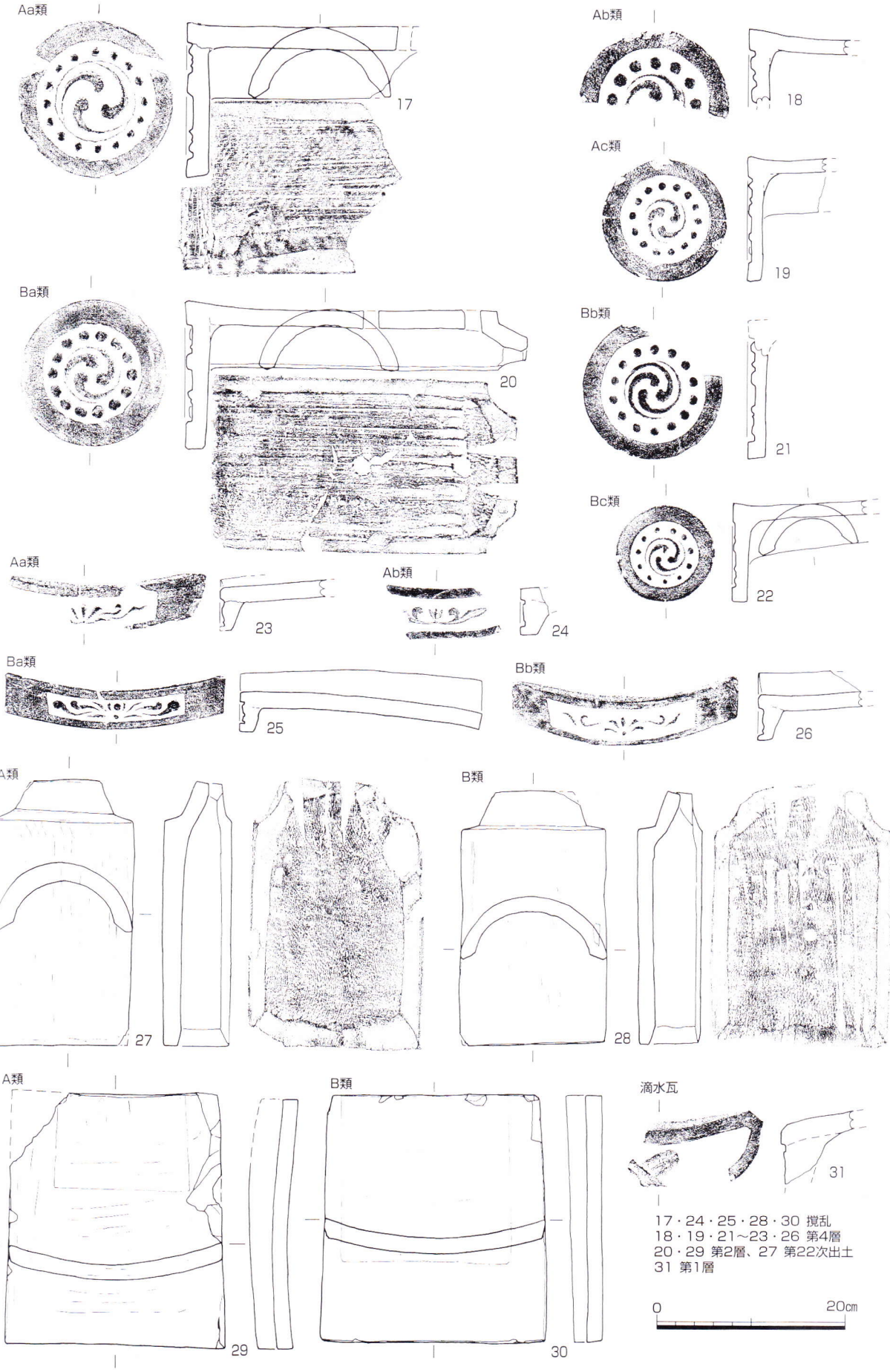
桟瓦（第17図39、図版24）

軒桟瓦に対応する桟瓦をそれぞれⅠ類・Ⅱ類とした。また軒瓦では確認されていないが、桟の屈曲がなだらかなものが一定量存在したのでこれをⅢ類とした。

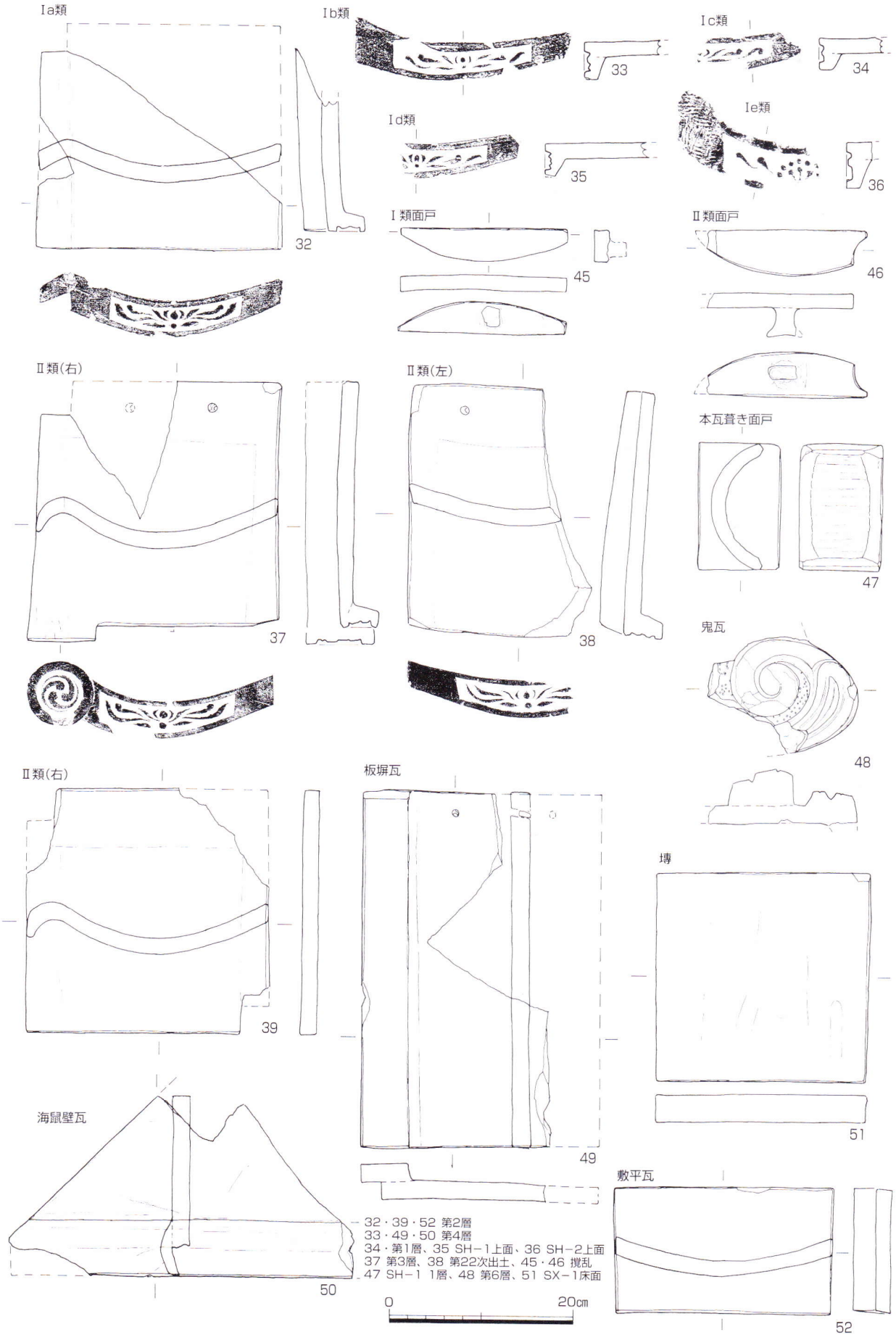
刻印瓦（第18図40～44、図版25）

刻印を持つ瓦は丸瓦に５種類、平瓦に４種類、桟瓦に１種類の合計27点確認している。そのうち「紀の次」銘丸瓦と「紀の定」銘平瓦のものはセットで用いられたものと思われる。「紀の次」銘丸瓦は四面に内叩きが密に施されることからＢ類に分類されるが、色調がすべて淡灰色を呈する点で他の資料と相違がある。出土位置は攪乱からの出土が多いが、第４層でも確認されている。

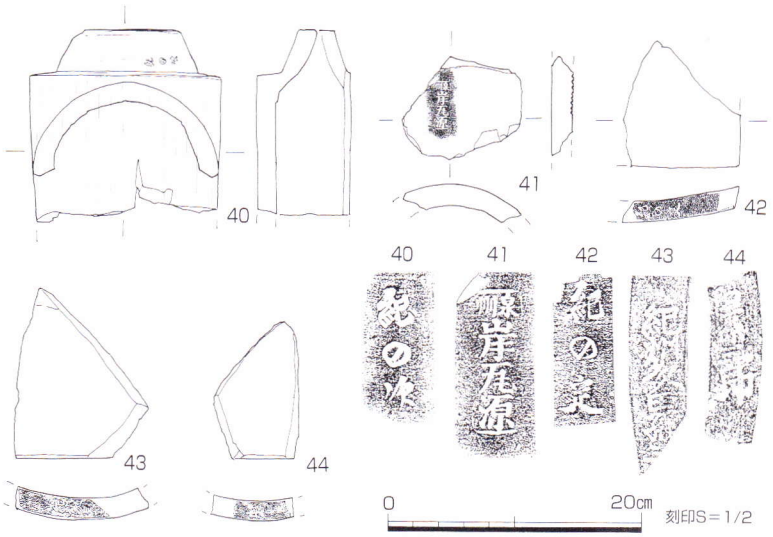
また、「紀州多田孫三郎」銘の資料が２点確認できた。これは瓦の反りが急であることが特徴で、


Aa類
17
Ab類
18
Ac類
19
Ba類
20
Bb類
21
Bc類
22
Aa類
23
Ab類
24
Ba類
25
Bb類
26
A類
27
B類
28
A類
29
B類
30
滴水瓦
31
17・24・25・28・30 撹乱
18・19・21～23・26 第4層
20・29 第2層、27 第22次出土
31 第1層
0
20cm

第16図　遺物実測図 2


Ia類
Ib類
Ic類
Id類
Ie類
Ⅰ類面戸
Ⅱ類面戸
Ⅱ類(右)
Ⅱ類(左)
本瓦葺き面戸
鬼瓦
Ⅱ類(右)
板塀瓦
塼
海鼠壁瓦
敷平瓦
32
33
34
35
36
45
46
47
37
38
48
39
49
50
51
52
32・39・52 第2層
33・49・50 第4層
34・第1層、35 SH−1上面、36 SH−2上面
37 第3層、38 第22次出土、45・46 撹乱
47 SH−1 1層、48 第6層、51 SX−1床面
0
20cm

第17図　遺物実測図3



種別	部　位	刻　印	色　調	調整等	出土地点	点数
丸瓦	玉縁上面	紀の次	淡灰色	凹面内叩き密	第２層、攪乱	13
	体部凸面	泉州岸瓦源	黒灰色	凹面滑り止め	第２層	1
	体部凸面	瓦亀	黒灰色	凹面滑り止め	第２層	1
	体部後端面	*	淡灰色	凹面ゴザ状圧痕	第１層	2
	体部後端面	⌒	淡赤色（被熱）		第１層	1
平瓦	側面	紀の定	淡灰色		第2・４層、攪乱	4
	側面	泉州岸瓦源	灰白色～暗灰色	ミガキ丁寧	SH-１上面	1
	側面	⌒	淡灰色		第１層	1
	側面	⊕	暗灰色	離れ砂	第１層	1
桟瓦	側面	紀州多田孫三郎	暗灰色	凸面離れ砂痕	攪乱	2

第18図　遺物実測図４

桟瓦と考えられるものである。１は残存長13.6㎝、残存幅10.5㎝、厚さ1.7㎝、２は残存長11㎝、残存幅6.6㎝、厚さ1.6㎝を測るもので、色調は凹凸面共に暗灰色、断面は灰色を呈する。凹面は丁寧なミガキが施され、凸面には離れ砂の痕跡が観察できる。

面戸瓦（第17図45～47、図版25）

本瓦葺きの面戸瓦は158点出土した。丸瓦を輪切りにしたタイプのもので、内面には内叩き痕が密に施される。法量の平均は幅９㎝、奥行き14㎝、高さ６㎝を測る。斜めの棟に対応するための平面形が平行四辺形の面戸も１点みられる。多くは第１・２層出土である。

桟瓦葺きの面戸瓦は通常の鰹面戸、左右の丸桟瓦に組み合う面戸２種を確認している（第17図）。出土点数は第３表のとおりである。

棟込瓦

輪違い瓦は44点出土している。大きさ、形態で６種類ほど確認できるが、出土層位による違いは確認できない。多くは石垣解体範囲より南側の調査区で出土した。菊丸瓦は第２層から２点出土している。

鬼瓦（第17図48、図版25）

鬼瓦の資料は数が少なく、確実なものは３点を数えるのみである。43はパーツを張り合わせて立体的に成形するものである。その他２点は攪乱からの出土で型成形の破片と釣穴部分の破片がある。

板塀瓦（第17図49、図版25）

板塀瓦は10点出土した。その内硬質のものが７点と、軟質のものが３点ある。板状の瓦に角桟を付けたもので、棟の方には斜めの釘穴が２個所穿たれる。復元するとは長さ39㎝、幅26㎝、厚さ２㎝を測る。出土層位は第１・２層中心であるが、軟質のものは第4b層からも出土していることから時期的に先行する可能性がある。ただし、軟質のものは破片であるため、法量の違いは不明である。

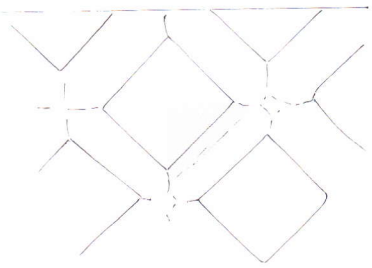
海鼠壁瓦（第17図50、図版25）

板状の瓦に、丸みを持つ桟が接合する形状のものが６点出土している。これらは板塀瓦の一種とも考えられたが、形状のわかる資料が全て三角形であること、漆喰が付着するものが３点あることからみて海鼠壁に用いた瓦と推定された。通常の海鼠壁では壁面に瓦板を張り目地を漆喰で盛り上げるが、本資料は４枚１組で使用したとみられ、桟の部分は漆喰で盛り上げる部分に相当するもの

と考えられる（第19図）。第４・５層からも出土していることから、第２遺構面段階に使用された可能性も考えられる。

塼（第17図51、図版25）

塼は石室に敷かれていた以外でも全体で2612kgと大量に出土している。特に量が多いのが第４・５層と石室内（289kg）である。第２遺構面で塼敷を３点検出しているが、これは上記の塼の出土層位が第５層中心であることからも裏付けられる。また石室内からも一定量出土していることは石室廃棄時に周辺で塼が使用されていた可能性を示すもので、これらの重量データは両時期の資料が混在していると考えられる。塼の規格は一辺約23cmとほぼ同一であるが、厚さを比較すると石室に敷かれていた95点が平均3.1cm、第５層上面の３点は2.7～3.0cmとやや薄い傾向がある。



第19図　海鼠壁瓦復元模式図

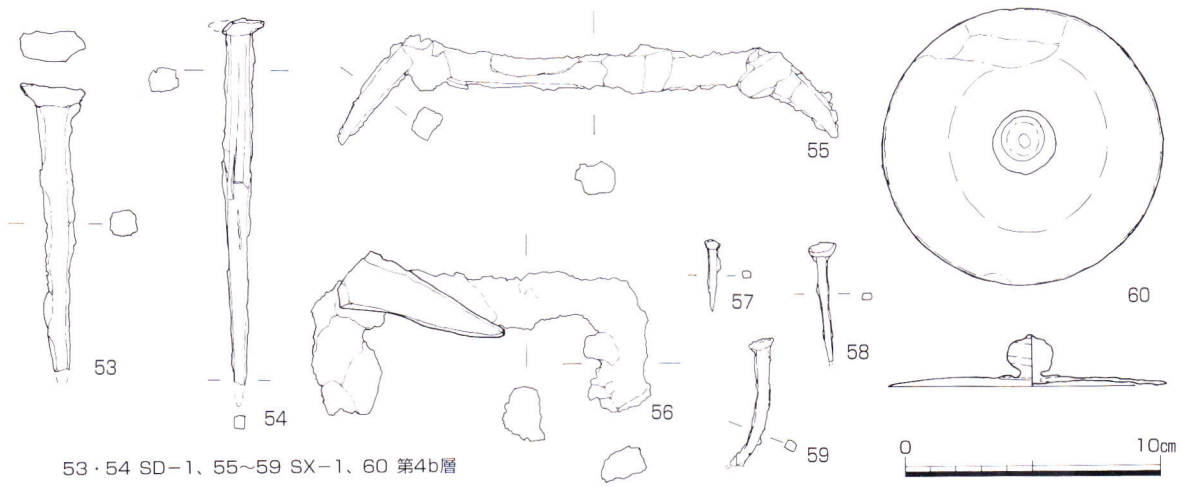
その他の瓦

軒平瓦の下に用いる敷平瓦（52）や熨斗付丸瓦破片の他、不明道具瓦片がみられる。

［金属製品］（第20図53～60、図版26）

出土した金属製品のうち鉄製品の大半は、SD－１（暗渠排水溝）とSX－１（石室）からのものである。鉄製品では釘が103点以上、鏃が５点、クサビが３点、銅製品では釘、蓋、銭貨は寛永通寶４枚（うち四文銭１枚含む）が出土した。また、キセル、銃弾の薬莢なども出土している。

53・54はSD－１出土の断面方形の鉄釘である。残存長は53が11.3cm、54が14.4cmを測り、幅は1.0cm、重量はそれぞれ31.9ｇ、28.7ｇである。55～59はSX－１出土である。55・56は鉄製鏃で、全体が錆で覆われているため本来の法量は不明であるが、長さは49が19.6cm、50が12.0cmを測り、重量はそれぞれ141.4ｇ、148.3ｇである。また56には、瓦の破片がサビによって付着している。51～53は断面方形の鉄製の頭巻釘である。長さは51が2.8cm、52が4.7cm、53が5.0cmを測り、幅２mm、３mm、５mm、重量はそれぞれ0.8ｇ、2.1ｇ、3.0ｇである。58はP－１出土である。60は第4b層出土の銅製蓋である。復元径10.9cm、器高2.0cm、宝珠つまみは最大幅1.7cm、高さ1.7cm、重量は69.4ｇで、全面に緑錆が付着している。地鎮具の蓋の可能性がある。



第20図　遺物実測図５

5．第26次調査

（1）調査の概要

［調査の方法］

調査対象石垣は結晶片岩の割石を用いたものである。調査区は石垣崩落部分を除く石垣上面部分に設定したもので、石垣上面の花壇とそれに伴う石積みを重機により撤去した後に、人力掘削を開始した。その範囲は南北長約80m、幅約１mの約80㎡であったが、花壇撤去により幅が２m近くになったため実際の調査面積は約150㎡である（第21図）。また、石垣解体に伴って断面調査を行い、石垣内部構造の記録保存に努めた。石垣断面については任意のラインを４ヶ所及び南北両端部２ヶ所の計６ヶ所設定し、作図を行った。

記録保存の方法としては、平面実測図をラジコンヘリによる航空写真測量（縮尺１/20）によって作図し、土層断面図、石垣断面図については手実測を行った。

［基本層序］

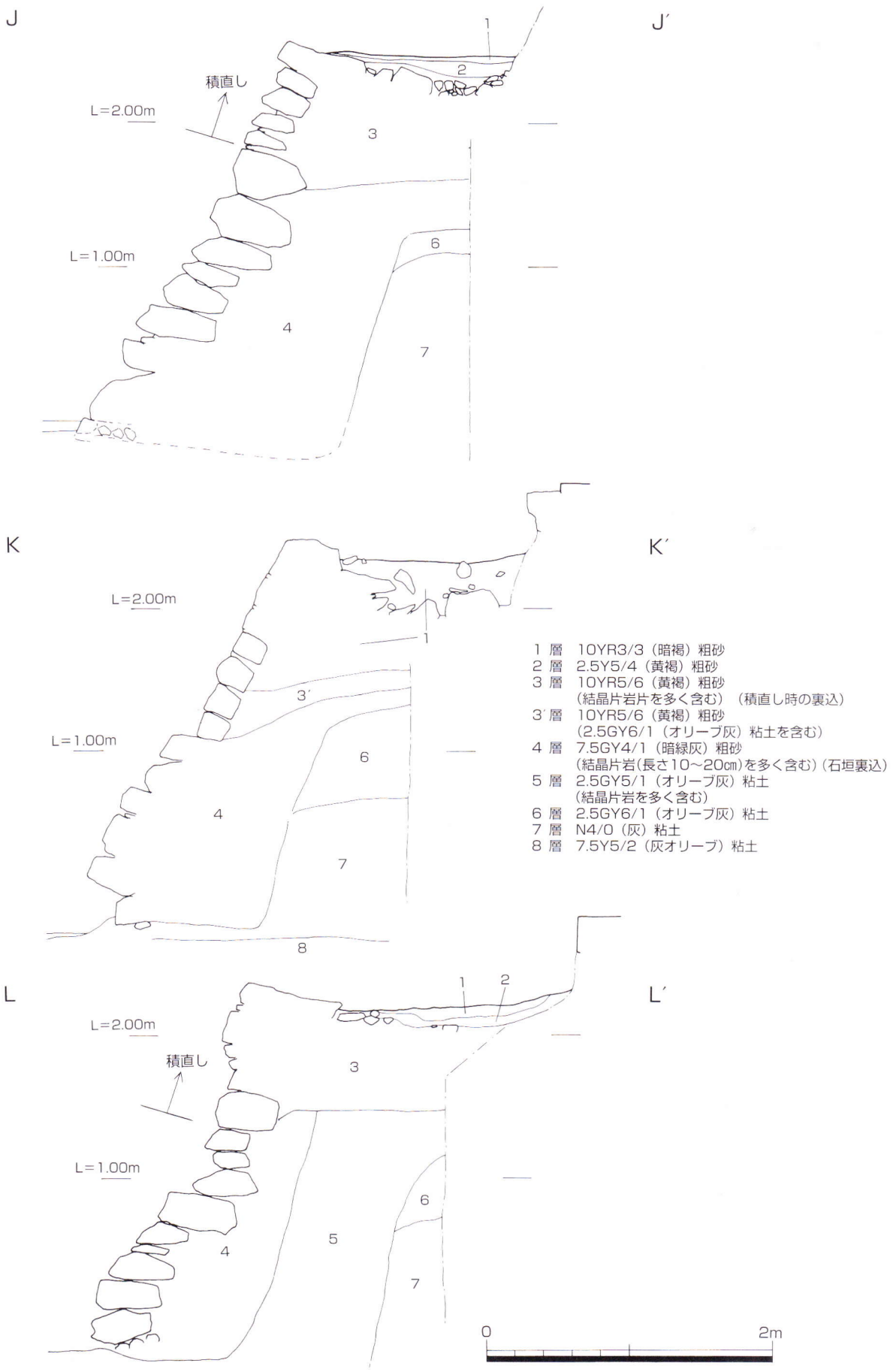
石垣上面の基本層序については場所によりやや異なる様相を示すが、概ね３層に分層される（第21図）。第１層は現代の花壇に伴う整地土とみられる暗褐色砂質土で、現況で５～10㎝の厚みを持つ。これが調査時における最上層にあたる。第２層（褐色砂層）は石垣構築の際の整地土と考えられ、５～10㎝の厚さで堆積している。この第２層下面から結晶片岩の石垣裏込石とその埋土（第３層）を検出した。

（2）遺構

石垣の南北長は約80m、基底部からの高さは約2.6mを測る（第21・22図）。石垣上部から約80㎝は全体的に積み直しが行われており、同じ結晶片岩でも石材が小型になっている。基底部の勾配は55～60度を測るが、この積み直し部分は70～80度となる。同様の積み直しは昨年度行った東堀南側の石垣（第23次調査）でも確認されている。また石垣の南側では部分的に砂岩によって積み直しされている個所もみられた。

石垣上面の調査では裏込石を検出したのみで、遺構は確認できなかった。断面調査では、裏込石は石垣積み直し部分と対応して、その単位を大きく２つに分けられた（第21図）。裏込石の石材は全て結晶片岩であり、その東西の厚さは下部が約80㎝、上部の積み直し部分が１m以上である。本石垣の構造としては石垣の背面には淡灰色粘土（第６層）・暗灰色粘土（第７層）が堆積しており、この粘土層をＬ字に切り込んで石垣が構築されていた。基底石は切り込んだ粘土の上に据えられている。粘土と基底石の間には石材を安定させるための結晶片岩の小片が１、２石程度みられたが、胴木や捨石等は確認できなかった。

なお調査対象石垣の中央付近には、水路の開口部が残存している状況であった。周囲をコンクリートで固め、天井の蓋石もコンクリートが使用されていることから近現代のものとみられる。「和歌山城下町図」（安政２（1855）年）によると、石垣から東へ続く水路の表現があるため、古い段階の水路が存在する可能性が考えられた。しかし、上面の調査ではコンクリートの蓋石に伴う裏込を検出したのみであった。石垣解体時では水路北側で木杭が出土したが、規模や杭の方向性から水路に伴



第21図　第26次石垣断面図

N

北側

X=−196710m

X=−196730m

S

Y=−75657m

L=1.00m

結晶片岩による積み直し箇所

砂岩による積み直し箇所

排水溝に伴う積み直し箇所

0 5m

N

X=−196750m

X=−196770m

S

南側

Y=−75657m

L=1.00m

第22図　石垣平面図及び立面図

うものではなく石垣積み直しの際の根固めに用いられたものと考えられる。石垣の断面観察でも裏込や背面の粘土層の状況は他の部分と比べほぼ同じ様な状況であり、調査では古い段階の水路の痕跡を示すものは確認できなかった。だが現存するコンクリート製の水路は南北約４ｍ、高さ約1.5ｍの範囲で石垣を解体して構築されているため、同一箇所に古段階の水路が存在したならば改修により消失した可能性も考えられる。

石垣を全て撤去した段階の調査地北端部で、北側にみえる南面石垣の延長部分を検出した。南面石垣は砂岩の打ち込みハギで構築されている石垣であるが、西面石垣内部から検出した延長部分は結晶片岩の野面積みである。このことから南面石垣は現存する西面石垣に先行して構築されたもので、後に石材を変更して積み直しが行われていることが明らかになった。

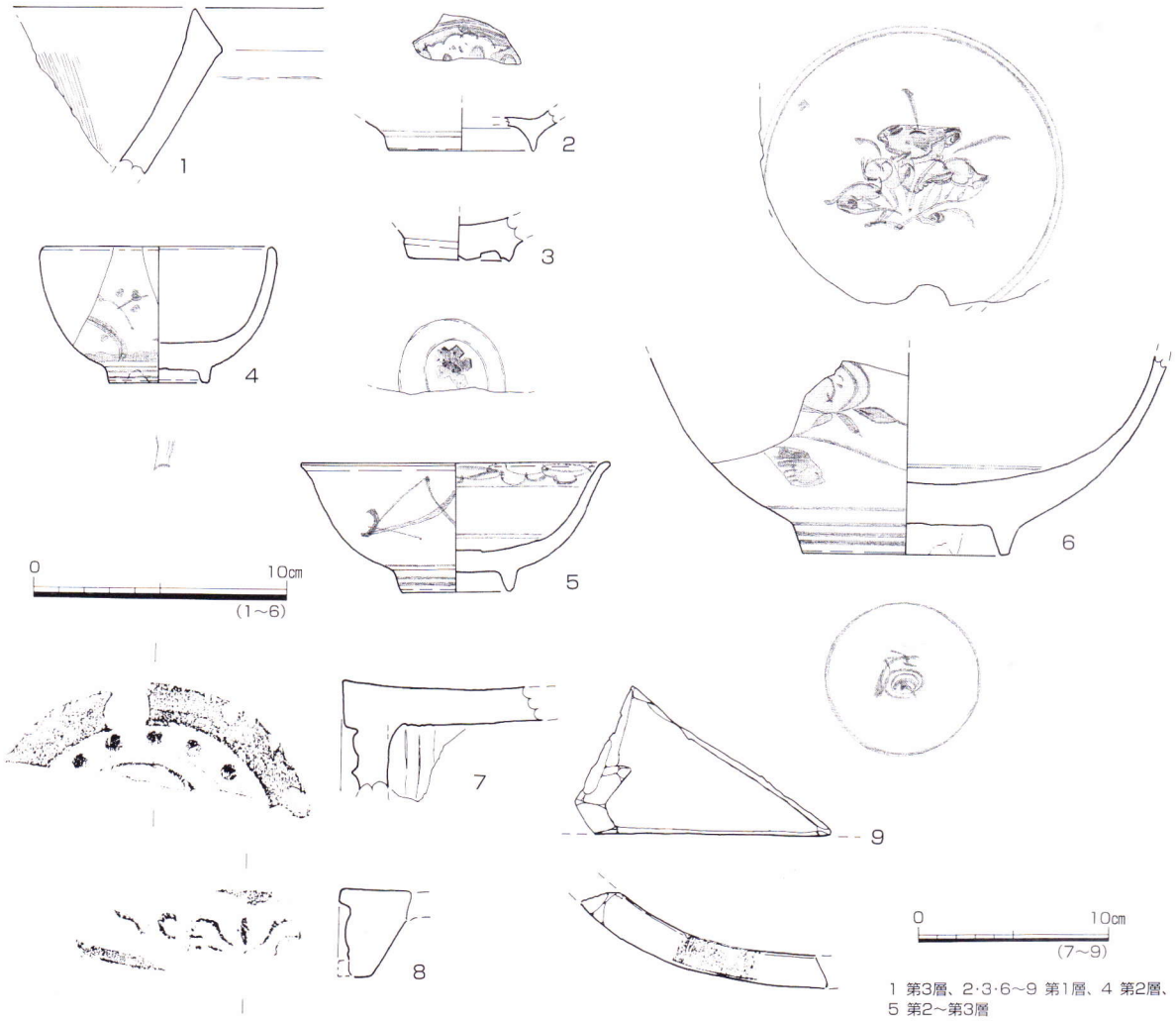
石垣裏込内の遺物は瓦片が２点出土したのみで、年代を推定できる資料を得ることができなかった。そのため、本石垣の構築時期について遺物から推定することが困難であるが、、基底部分に関しては石垣石材に結晶片岩割石を用いている点、石垣の角度が60度を下回っており、これまで調査が行われた創建期とみられる結晶片岩石垣と類似する特徴を有している点、城内に占める位置などから、南面石垣よりは後出するが和歌山城の創建期に成立した可能性が考えられる。

（４）遺物（第23図、図版26）

遺物は土師器、瓦質土器、中国製磁器、肥前系陶磁器、瀬戸･美濃系陶磁器、産地不明の陶磁器、瓦、土製品（焼塩壺・土人形）、銭貨（寛永通寶３枚・銭種不明４枚）、鉄釘などの金属製品、サザエや蛤などの自然遺物が遺物収納箱（コンテナ）に約９箱出土した。石垣裏込出土遺物はごく少量で瓦片が２点のみであった。その他、周辺の堆積土となる第６・７層からは須恵器、常滑焼の甕が出土した。

１は備前焼擂鉢である。残存器高6.9㎝、外面には重ね焼きの痕跡がみられる。２は中国製染付碗の底部で、内底面中央部を盛り上げる、いわゆる「饅頭心」のタイプである。高台径5.7㎝、残存器高1.6㎝を測る。１・２は室町時代のものと考えられる。３は肥前系灰釉椀の底部である。高台径4.0㎝、残存器高1.8㎝を測る。高台畳付けは露胎であり、回転糸切痕を残すものである。４～６は肥前系の磁器染付である。４は草花文の丸碗で、口径9.0㎝、器高5.4㎝、高台径3.9㎝を測る。また外底面には退化した「大明年製」の銘がみられ、18世紀後半の所産とみられる。５は口径12.2㎝、器高5.1㎝、高台径4.3㎝を測る端反り碗である。外面に折松葉文、口縁部内側は連弧文帯が描かれ、見込み部には蛇ノ目釉剥ぎ、中央部の二重圏線内にコンニャク印判による五弁花が施されている。18世紀前半の所産とみられる。６は高台径8.2㎝、残存器高8.0㎝を測る大鉢の底部である。外面と内底面に草花文を描き、外底面には圏線の中に渦「福」銘がみられる。

７は三巴文軒丸瓦である。瓦当の厚さ2.5㎝、丸瓦部の厚さ1.8㎝、残存長5.6㎝を測り、瓦当径17.6㎝、珠文数は17個を復元できる。８は軒平瓦である。平瓦部の厚さ1.5㎝、残存長3.8㎝を測る。瓦当表面にはキラコが付着している。９は桟瓦の平瓦部である。厚さ1.8～2.0㎝、残存長7.7㎝を測る。また側面には「□□□萬□□組合・傘製」の刻印がある。これらの遺物は全て包含層からの出土である。



第23図　遺物実測図６

６．まとめ

（１）二の丸櫓台石垣上面建物の変遷

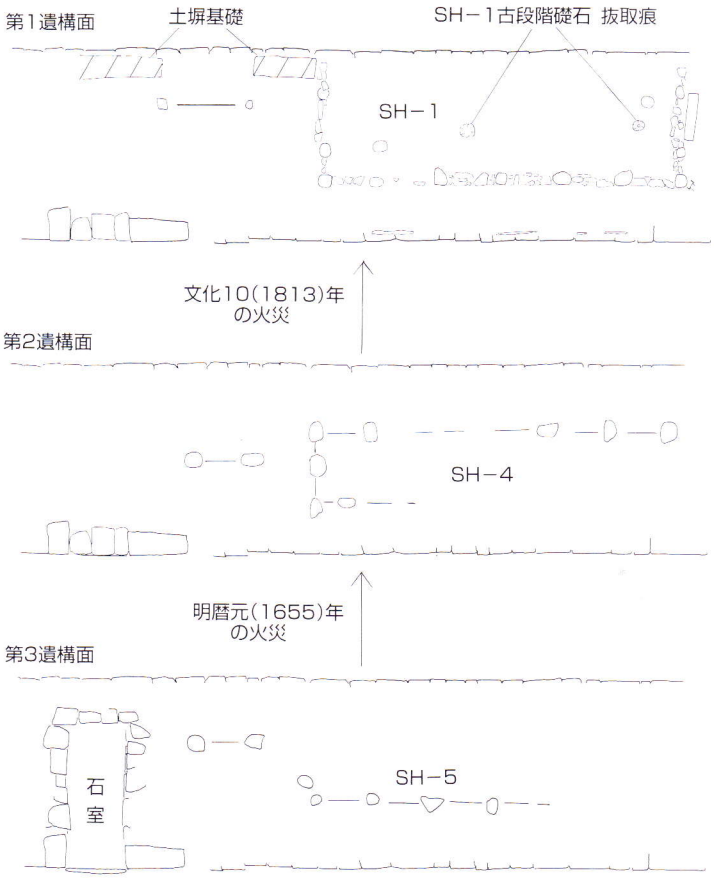
二の丸上面では３時期の遺構面を検出し、それぞれについて御橋廊下関連の礎石と多聞櫓の礎石等を検出した。その遺構の変遷は第24図のように把握される。

御橋廊下関連礎石については、第２・３遺構面ではその間隔は約２ｍであったが、第１遺構面の段階では間尺を約2.9ｍに変更し、南側に拡張していたことが明らかになった。第22次調査の際に堀底で検出した御橋廊下橋脚基礎との関係については、礎石の配置や位置関係から第１遺構面の礎石に対応するとみられる。また「和歌山御城内惣御絵図」に描かれる御橋廊下は1.5間の幅であるが、当該期の遺構とみられる第２遺構面の礎石は１間幅で絵図と対応しない。今回確認した礎石は３時期分であるが、検出した礎石以外に改修によって失われた礎石があった可能性も考えられる。

次に多聞櫓について、少なくとも調査区北側のSH－１・４・５についてはほぼ同一場所に繰り返し構築されており、「和歌山御城内惣御絵図」に描かれる多聞櫓とほぼ同様の位置関係であることが明らかになった。絵図の年代は18世紀末とみられるが、多聞櫓等の施設は江戸時代の前半から場所を踏襲されて繰り返し構築されていたことが伺える。

第３遺構面検出の石室については、①層位的に、第２遺構面のベースとなる第５層対応の第５′層が石室埋土の上方に堆積する点、②「和歌山御城内惣御絵図」の段階で石室が描かれていない点からみて、第２遺構面の段階では石室は閉塞されていたと考えられる。埋土からは18・19世紀に下る時期の陶磁器も数点出土しているが、これは第１遺構面から切り込む攪乱及び閉塞石の据え直しの影響による混入の可能性が高く、閉塞の時期について遺物から特定することは困難である。

なおこの石室入口部分の左右の石垣にはほぞ穴と周辺を打ち欠いた痕跡があるが、これも石室上屋構造等に関係するものと考えられる。今後上屋構造の復原と共に、二の丸遺構面の標高と石室の関係等についても周辺の調査事例をふまえて検討していく必要があろう。



第24図　遺構変遷図

（２）二の丸櫓台石垣検出の石室について

二の丸櫓台石垣に組み込まれた石室について、断ち割り調査の結果などからその構築過程及び周辺石垣との関係などについて整理を行う（第25図）。

二の丸と西の丸間の堀に接する二の丸側石垣について、標高7.0ｍに積み上がった状況までをＡ工程とする。石室付近について、Ａ工程上面の整地状況は堀側石垣面から約4.40ｍの距離まで結晶片岩の割石がみられ、それより二の丸側は砂岩円礫を用いたものである。

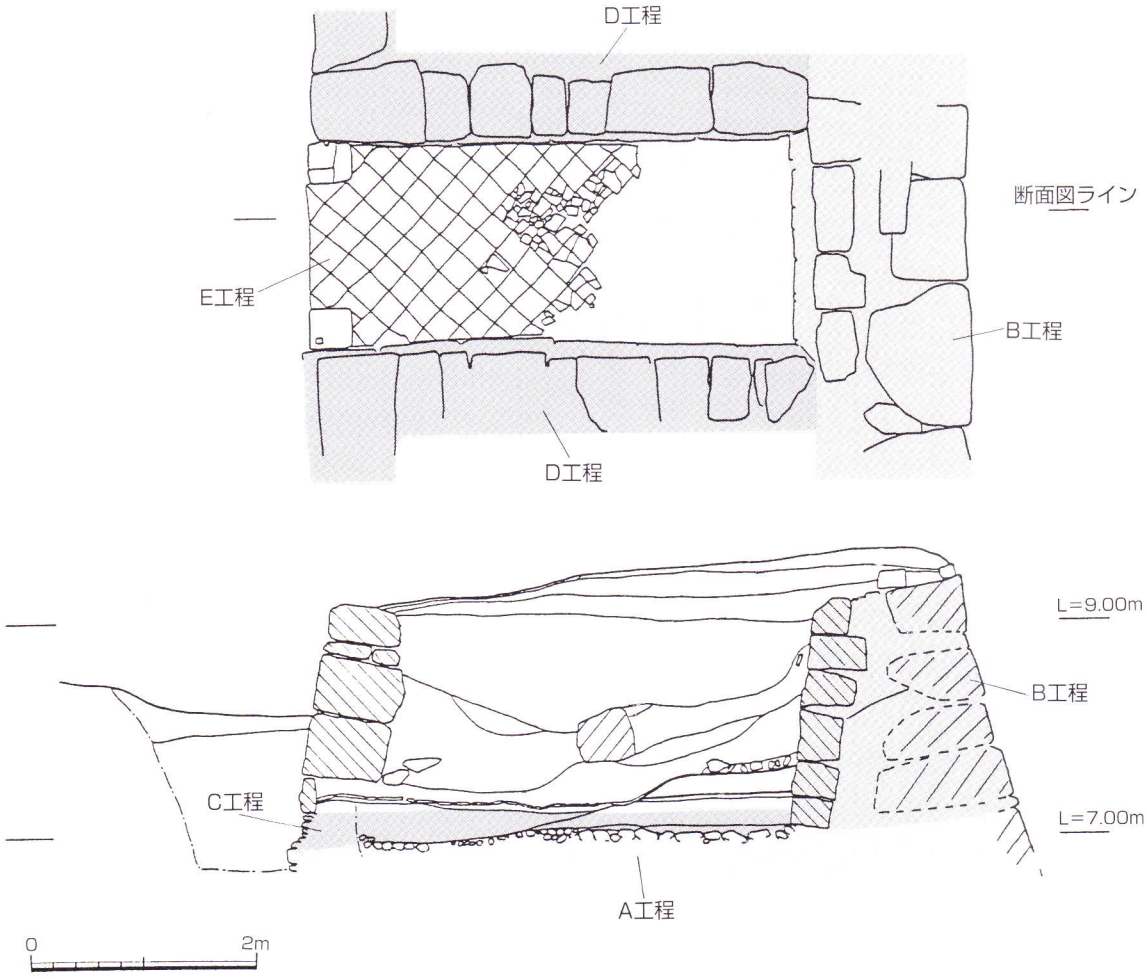
石室の構築について、Ａ工程の後に、堀側の石垣が二の丸櫓台天端まで積み上がっており、その作業と同時並行で石室奥壁が積み上げられたものとみられる。この時、堀側石垣天端は標高9.40ｍ、石室奥壁石垣天端は標高9.20ｍを測り、堀側石垣と石室奥壁石垣間の裏込めには、標高8.20ｍまでは結晶片岩の割石、それより上部は砂岩円礫を用いたものである。これら石垣裏込石の石材の相違はＡ工程までの整地状況に対応したものであると考えられる。ここまでの状況をＢ工程とする。

Ｂ工程の次の作業として、石室石垣側壁の基底石が並べられる。この基底石は二の丸側石垣の基底石に連続するもので、この段階に二の丸側石垣基底石及び石室石垣側壁の基底石が同一工程の作業として行われたものとみられる。この作業工程をＣ工程とする。

C工程で設置された基底石上に石室石垣側壁が積まれ、裏込石は砂岩円礫が用いられる。この段階に二の丸側石垣も石室石垣側壁に連続して基底石上に構築されており、これについても同一工程の作業として行われたものと考えられる。当然、櫓台内部の整地についても並行して行っているはずである。この作業工程をD工程とする。

ここまでの工程について、工程Bの堀石垣及び石室奥壁構築の際には、石室奥壁周辺以外の二の丸側石垣の構築及びその間の整地は並行して作業を行ったものと考えられる。また、石室におけるC・D工程についても、作業順としてはB工程の後だが、B工程の進行と並行して作業は進められたものと考えられる。

次の工程として、石室前面の敷居石を設置し、扉の軸受けとみられる枘穴を持つ礎石2基を敷居石内側に設置する。これらの設置に際しては、前段階のD工程時に設置を考慮した基底石材の内側への張り出し等がみられる。石室内部については、まず奥壁側から半分までに焼土を混入した黄褐色の細砂（SX－1第7層）を厚さ約5㎝入れ、その上に結晶片岩・砂岩の細片を含む灰オリーブ色の粗砂（SX－1第6層）を厚さ20～30㎝入れる。次に入口側から暗灰黄色シルトの土（SX－1第5b層）を20～30㎝の厚さで入れ、奥壁側にも同じ土を厚さ5㎝程度入れ整地を行う。さらに、入口



第25図　石室構築過程模式図

側約２／３までのSX－１第５ｂ層上面に、にぶい黄色の細砂（SX－１第４層）を入れ、その部分を瓦製の塼を用いた四半敷とするものである。SX－１第４層の細砂は四半敷の下地と考えられる。ここで、床面は均一レベルであったものと考えられ、一時期の床面の状況であったとみられるが、その後奥壁前の土間部分に、にぶい黄褐色の細砂混シルトの土（SX－１第5a層）を約20㎝の厚さで入れ土壇とした。ここで土壇の天端は標高7.60m、四半敷面の標高は7.40mを測り、土壇は四半敷面より約20㎝高く作られる。ここまでの作業工程をＥ工程とする。なお、奥壁から半分に焼土の混入した粗砂（SX－１第７層）を入れることは、土間及び土壇の下地の意味があったのかもしれない。

石室はこの後、扉や上屋構造などが作られたものと考えられるが、具体的なことは調査成果からは不明である。石室と二の丸櫓台石垣の関係を整理するならば、Ａ工程を石室構築の基盤面までの堀側石垣構築及び二の丸造成の整地作業、Ｂ工程は堀側石垣と石室奥壁の構築が同時並行、Ｃ工程からＤ工程までは二の丸側石垣と石室側壁の構築が同時並行の各作業工程がみられ、最終的にＥ工程で石室独自の造作を行ったものと考えられる。このことは、石室構築が当初から計画性を持った作業工程に組み込まれて行われたことを示すものと考えられる。また、石室の隅角部算木積部分にみられる旧石垣に用いられていたと考えられる石材の転用についても、旧石垣解体時に転用目的で算木積の石材を保管していた可能性が高く、二の丸拡張時の城普請における解体石材の計画性の高い活用状況を見て取れよう。

なお、石室の用途であるが、扉が内開きであると考えられることと四半敷きの塼表面が直接火を受けた痕跡があり、四半敷き部分には物を置かなかったものと考えられる。また、奥壁前の土壇と四半敷きとの間に浅い柱穴が両側壁に沿って対に掘られており、土壇上部に木製の棚を造作していた可能性を考えることができ、この部分が収納スペースであったものと考えられる。これらの状況からみて、収納物の容量に限りがあり、何か特定の物を収納していた可能性を考えることができる。

以上、二の丸櫓台石垣に組み込まれた石室について、構築過程及び周辺石垣との関係を明らかにし、石室構築が二の丸拡張時における城普請の当初から計画性を持った作業工程に組み込まれて行われたことを指摘した。

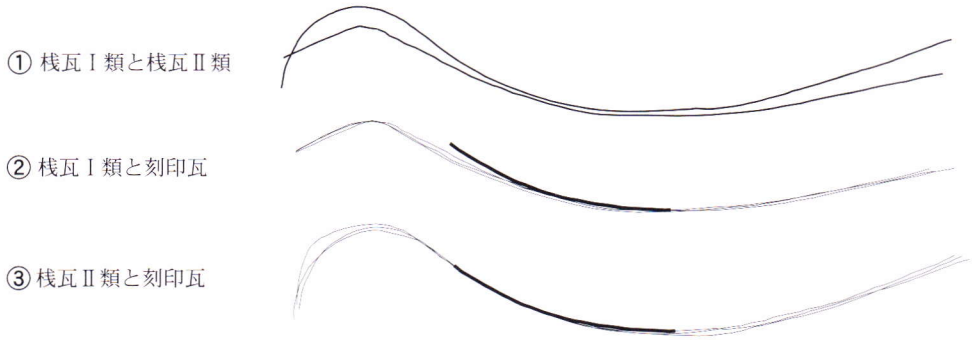
（３）御橋廊下関連の瓦について

御橋廊下に関連する瓦としては軒桟瓦Ⅱ類及び桟瓦Ⅱ類の丸桟瓦が挙げられる。これらの丸桟瓦は桟部が他例と比較して特殊な形状をもつことから御橋廊下に葺かれていたことが指摘されている。

【丸桟瓦の所見】

第25次調査では、この桟瓦について追加資料を得ることができた。第25次調査出土の軒桟瓦Ⅱ類は９点で、すべて右桟瓦である。右桟の軒瓦を良好な形で確認したのは今回が初めてとなる。堀中では左桟瓦が多く出土しており、分布状況に違いがみられるようである。左右の瓦当はほぼ同様の文様構成であるが、子葉の端部の形状が異なっており、右軒桟瓦では丸く収めるのに対して、左軒桟瓦では上方に伸びている。出土層位は右桟関係資料は第１・２層、左桟関係資料も第１・２層及び堀中の出土で、現時点で層位的な時期差を見出すことはできない。

また今回、この桟瓦に対応する面戸瓦を抽出することができた。左右２種類確認しており、桟のラインに対応して弧状にえぐられている点が特徴である。以上の桟瓦、面戸瓦は第１・２層からの



第26図　瓦上面フォルムの対照（S＝1／3）

出土であり、最終段階の御橋廊下に使用されたものとみて大過ないと思われる。

【「紀州多田孫三郎」銘の刻印瓦と桟瓦Ⅱ類の関係】

今回抽出した刻印瓦の内、桟瓦とみられるものに「紀州多田孫三郎」銘の瓦片2点がある。この瓦片は反りが著しい点が特徴であるが、この瓦のフォルムの検証を行うことにより既知の桟瓦への帰属を検討できると考えた。そこで可能性がある桟瓦Ⅰ・Ⅱ類との外形ラインの比較を試みた。

第26図は桟瓦Ⅰ類・Ⅱ類をそれぞれ3・4点抽出し、フォルムを対照したものである。なお、軒桟瓦Ⅰe類は厚さ・断面胎土が異なることから除外した。①は桟瓦Ⅰ類・Ⅱ類のフォルムを対照したもので、Ⅰ類に比べてⅡ類の屈曲が著しいことが読み取れる。②はⅠ類、③はⅡ類と刻印瓦を比較したもので、これをみると、桟瓦Ⅰ類及び平瓦は比較的なだらかなラインであるため符合しないのに対して、Ⅱ類の桟瓦はフォルムが合致することが読み取れる。また凸面離れ砂痕の状況、瓦両面及び断面の色調もⅡ類と共通する。

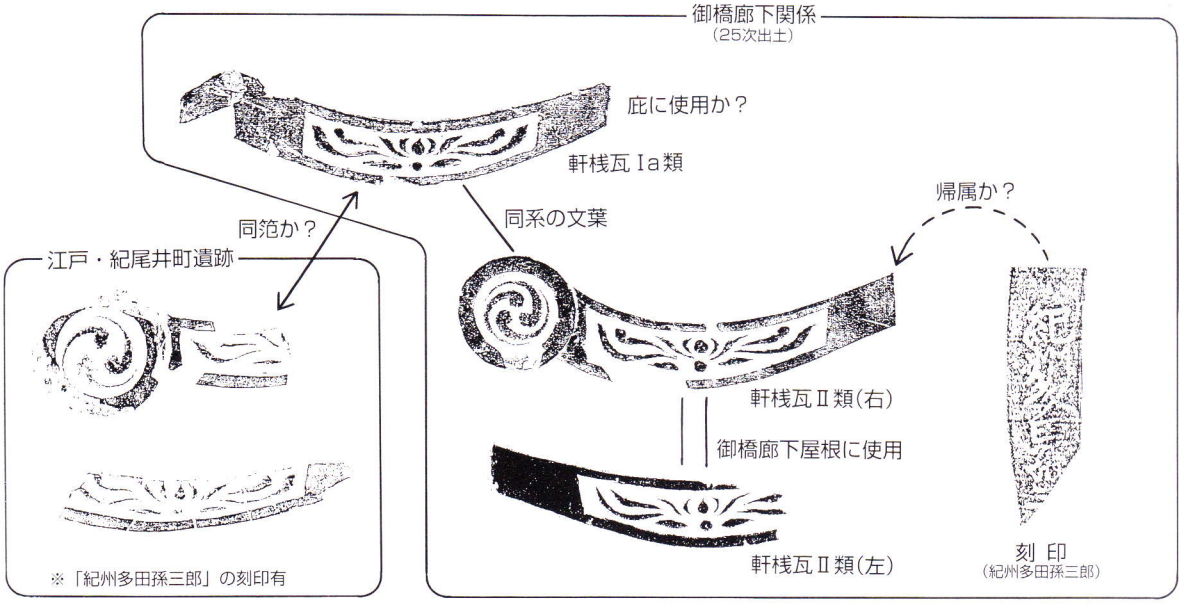
上記の点から、「紀州多田孫三郎」銘の桟瓦片は桟瓦Ⅱ類に帰属する可能性が考えられる。なお具体的な部位については狭端部（棟側）の中央部からやや桟部寄りとみられ、釘穴がみられないことから軒桟瓦ではなく桟瓦であると推定できる。

【江戸紀州藩麹町邸出土資料と軒桟瓦Ⅰa類の関係】

軒桟瓦Ⅰa類と同一文様の瓦は東京都千代田区紀尾井町遺跡でも確認されている。これは1986年に行われた紀州藩麹町邸の調査で、SK－8から25点出土している（第27図）。平瓦部の文様構成は図版・写真等で見る限りほぼ同一であるが、小丸の有無で相違がある。重要な点はこの瓦当周縁に「紀州多田孫三郎」の銘が押されているとのことで、胎土分析の結果でも産地が和歌山であることが明らかにされている。つまり紀州から江戸に持ち運ばれた瓦である。多田は現在の海南市多田地区で、この多田地区の妙台寺の過去帳には「弘化二年（1845）瓦屋孫三郎」の記載が残されている。

第27図　紀尾井町遺跡出土の軒桟瓦（S＝1／3）

さらにこの資料には被熱による変色がみられるものが含まれていることが注目される。紀州藩麹町邸唯一の火災は文政6（1823）年12月25日の大火であ



第28図　御橋廊下関係瓦相関図

ることが文献資料から明らかで、遺物年代の下限はここに設定されている。この年代は御橋廊下の再建時期（文化十（1813）年火災以降）とも重なってくるものである。

以上のことを考慮すると、軒桟瓦Ⅰａ類は海南の「多田孫三郎」のもとで作られた可能性が高いとみられる。

【御橋廊下関連瓦の生産地について】

以上の刻印瓦の検討、丸桟瓦と同系統の文様である軒桟瓦Ⅰａ類の類例の存在、またその年代観を考慮すると、軒桟瓦Ⅰａ類と軒桟瓦Ⅱ類は共に現在の海南市多田地区で作られた可能性が高い。また軒桟瓦Ⅰａ類も同一時期に御橋廊下に使用された可能性が考えられ、その場合庇に葺かれていたことが推定できる。

（4）軒瓦のセット関係と土塀の瓦の推定

軒丸・軒平瓦の内、軒丸瓦Ｂａ類と軒平瓦Ｂａ類はそれぞれ出土量が最も多く、文様・技法共に時期的に新しい様相を持つなどの共通点がみられることから、セットで使用されたとみられる。第1・2層中心に出土することから、この瓦群が第1遺構面の多聞櫓等に葺かれていた可能性が高い。

次に軒丸瓦Ａａ類と軒平瓦Ａａ類は堀中の調査区で多く出土しており、量的な比率から考えてセット関係と捉えられる。瓦当文様の類例をみると、軒平瓦Ａａ類は旧名手本陣妹背家住宅の再建時の瓦（享保3年　1718）や紀伊国分寺本堂（元禄13年　1700）とほぼ同一の文様構成であり、17世紀後半から18世紀前半の時期が推定できる。堀中出土のＡａ類は石垣上部の多聞櫓の配置と分布状況が対応することから、これらの瓦も多聞櫓に葺かれていたものとみられる。ただし、軒丸瓦Ａ類はいくつかの文様差を持つため、さらに年代的に細分できる可能性が高い。

土塀関連の瓦としては、第22次調査時に土塀基礎北側周辺の第3層上面から出土した軒平瓦が挙げられる（第22次調査－遺物番号35参照）。多聞櫓周辺から出土している軒平瓦Ｂａ類と同一の文様構成であるが、通常の全長が27㎝程度であるのに対してこの資料は38.8㎝と約1.5倍ほど長い。これ

は１枚で土塀屋根の大半をカバーするための仕様であることが考えられる。またこの調査の際、同一文様の軒平瓦が漆喰と共に土塀基礎の傍から出土した状況も確認しており、これらの位置関係からみても、第１遺構面に対応する土塀瓦と考えられる。また、軒丸瓦については直接的な資料は確認できなかったが、軒平瓦Ｂａ類とセット関係にある軒丸瓦Ｂａ類が文様的に対応するとみられる。

（５）平瓦の厚さ度数分布からみた瓦の層位的帰属の検討

第25次調査では上下２層の焼土層を確認しており、それぞれの火災の時期が文献等で推定できることから、焼土層を基点として年代を検討することが可能である。そこでここでは視点を変えて、先に示した各種軒瓦分類の時期的対応について、各土層出土の瓦との対応によって軒瓦の層位的な帰属を考えてみたい。

調査で出土した出土瓦のほとんどは破片であることから、検討の材料になるものは平瓦の厚さになる。従来これらの瓦片に対する分析・研究は盛んではなかったが、最近、平瓦の厚さの計測・分析から瓦の規格性やその技術的背景を検討する新たな試みが行われつつある（武内2000）。そこで同様の観点から平瓦片について厚さ計測を行い、統計処理を行うこととした。

計測に際しては瓦の中央部分を基本とし、測定した数値は端数切り上げの１㎜単位で記録した。計測点数は凡例に記載のとおりで、各層内の比率を把握するために百分率で折線グラフを作成した（第５表）。

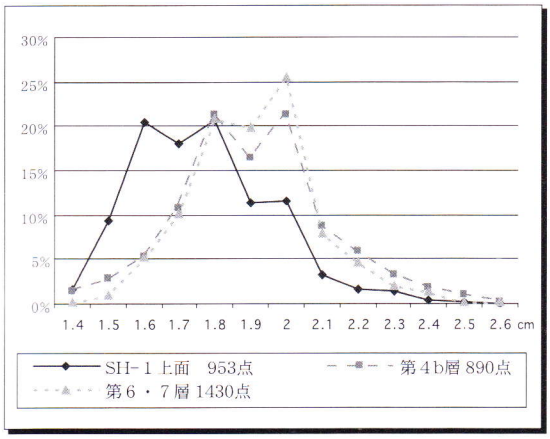
①は幕末の多聞櫓廃棄時の遺物群であるSH－１上面、文化十年（1813年）の火災後の整地層とみられる第4b層、明暦の大火（1655年）後の整地層とみられる第６・７層から出土した平瓦の厚さ度数分布グラフである。第６・７層は1.8㎝にも小さな山がみられるが２㎝を頂点に分布を示している。第4b層は1.8㎝と２㎝の２つに頂点を持つが、被熱瓦を除いた250点の分布をみた場合、1.8㎝が27％、２㎝が16％と1.8㎝の比率がやや高い。SH－１上面では1.6㎝が20.6％、1.8㎝が20.7％とほぼ同率を示す。各グラフには複数の山が存在するが、これは下層や周辺の遺物の混入によるものが１割程度の比率で含まれているためと考えられる。この混入の度合いは、多聞櫓上面資料に含まれている被熱瓦の量からも推測される。それを差し引いて考えると、各グラフは概ね正規分布曲線を示すとみられ、規格性の存在が認められる。大枠でみた場合、第６・７層は2.0㎝、第4b層は1.8㎝、SH－１上層は1.6㎝に分布の中心を持っており、これはそれぞれ７分・６分・５分の厚さ規格を指向したものと捉えることができる。

②は軒平瓦Ａａ類とＢａ類の平瓦部の厚さ度数分布グラフである。計測に際しては第22次調査資料も含めた。それぞれ計測点数が少ないため、今後の資料の蓄積によって変化する可能性もあるが、大体の傾向は把握できると考える。これによると２種類とも1.8㎝に頂点を持つことがわかる。軒平瓦Ａａ類はＢａ類より先行する時期とみられるが、第６・７層とは分布が対応しないことから、明暦以降の時期と考えられる。これは先の旧名手本陣妹背家住宅等の類例からみた年代観とも合致する。軒平瓦Ｂａ類は出土層位・製作技法から第１遺構面の多聞櫓と考えられるが、最終段階のSH－１上面資料は1.6㎝と1.8㎝の２つが分布の中心であることから、最終段階での部分的な使用もしくは第１遺構面でもやや古い段階とみられる。調査ではSH－１は床面が２時期あることを確認しているので、軒平瓦Ｂａ類はこの古段階の多聞櫓に対応する可能性も考えられる。

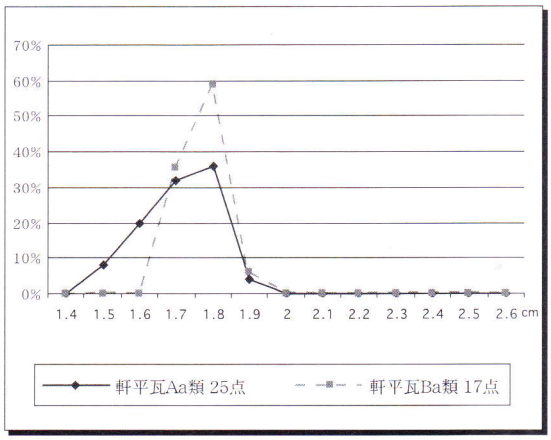
③は桟瓦Ⅰ類とⅡ類の厚さ度数分布グラフである。軒桟瓦及び第27次資料の一部を含めて計測を行っている。グラフをみると、桟瓦Ⅰ類は厚さ1.6cmを指向していることが読み取れる。これはSH－１上面の様相と類似するもので他に1.6cmに頂点を持つものはみられない。よってSH－１上層資料の分布の中心をなしているものは桟瓦片であり、多聞櫓の最終段階には桟瓦Ⅰ類が使用されていた可能性が高いとみられる。桟瓦Ⅱ類はⅠ類とは分布がやや異なり、1.7～1.8cmを中心に分布する。こ

第５表　瓦厚さ度数分布グラフ

①焼土層及びSH－１出土平瓦



②軒平瓦



瓦　内　訳

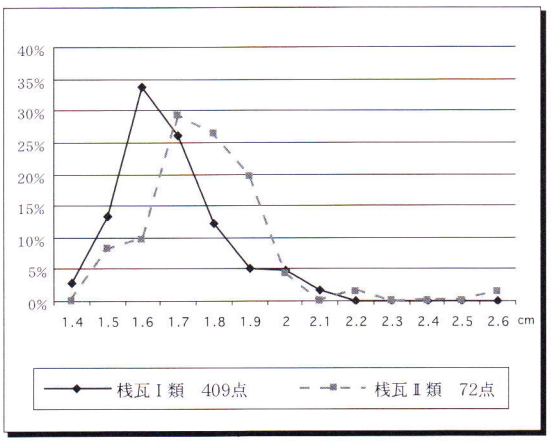
	通常の瓦（点数）	被熱瓦　（点数）
SH－１上面	880	73
第　４　ｂ　層	250	640
第　６　・　７　層	345	1085

平均と標準偏差

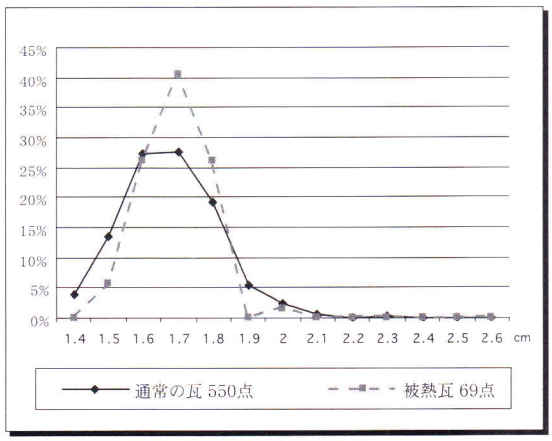
	厚さ平均　（cm）	標準偏差　（cm）
軒平瓦Aa類	1.71	0.104
軒平瓦Ba類	1.77	0.059

※第22次資料を含む。

③桟瓦



④第27次堀底部第２層（焼土層）出土平瓦



平均と標準偏差

	厚さ平均　（cm）	標準偏差　（cm）
桟　瓦　Ⅰ　類	1.68	0.145
桟　瓦　Ⅱ　類	1.76	0.167

※軒桟瓦・第27次資料を含む。

平均と標準偏差

	厚さ平均　（cm）	標準偏差　（cm）
通　常　の　瓦	1.67	0.139
被　　熱　　瓦	1.69	0.093

れは御橋廊下に使用された特殊な用途のためなのか、あるいは丸桟瓦の特徴か、また産地の違いであるのか現状で判断できないが、他の丸桟瓦資料との比較により検証できる可能性がある。

④は2002年度に行われた堀内部石垣裾の調査（第27次）の第２層（焼土層）出土平瓦の厚さ度数分布グラフである。通常の瓦は1.6～1.7㎝、被熱瓦は1.7㎝を頂点に持つ。第27次で確認された焼土層は１層のみであり、第25次（石垣上部）の上下２層の焼土層との対応が注目されるものであるが、①と④のグラフと比較した場合、厚さ２㎝の瓦はほとんど含まれていないため、第６・７層には対応しないといえる。ややずれはあるが文化十年の焼土層とみられる第4b層に対応する可能性が高い。また第27次堀底部の通常の瓦と被熱瓦を比較すると、被熱瓦は２次焼成による膨張のためやや厚い傾向がある。しかしそれも１㎜程度であることから、２次焼成を受けた遺物群全体の厚さ度数が２㎜以上の変化をすることはないと考えられる。つまり、被熱による影響を考慮しても第６・７層との対応はしないとみられる。

平瓦の厚さ度数の検討を通じて、以上のことを明らかにできた。この検討は、同一場所に同規模の建物が３時期存在したため可能なものであり、建物の規模が異なる場合には注意する必要がある。また表には参考までに平均値と標本標準偏差を示した。偏差の数字が小さいほど厚さのばらつきが少ない、つまり規格の精度が高いとみることができる。これをみると軒平瓦Ａａ類とＢａ類では、同じ規格を指向しても古い様相を持つAa類の精度が低いようである。また桟瓦Ⅱ類は標準偏差0.167㎝と他に比べて数値が高めで規格精度がやや低いことが読み取れるが、これは生産地による違いの可能性もある。

（６）丸・平瓦の重量比率からみた多聞櫓屋根瓦の推定

平瓦片の検討から、多聞櫓の最終段階では桟瓦Ⅰ類が葺かれていた可能性があることが判明した。このデータが他の状況と整合性があるのか、また古い段階にも桟瓦葺き建物が想定できるのかを検証するために、丸・平瓦の重量比率に注目してみた。

規格品である瓦の場合、同じ建物内の丸・平瓦１個体あたりの重量はほぼ同一である。また本瓦葺きの瓦における丸・平瓦の員数比率は、建物の規模・構造により差異はあるが、概ね一定であるとみられる。以上のことを勘案すると、本瓦葺きの丸・平瓦の重量比率はある一定値に収まるはずである。もし包含層出土瓦で大幅に平瓦の比率が高い場合、それは本瓦葺き以外の瓦、つまり桟瓦が含まれているとみることができる。そこで修復工事により瓦の詳細が判明している建造物のデータと比較しながら検討を行った。

まず、修復工事により瓦の詳細が判明している粉河寺大門、旧中筋家住宅、長楽寺仏殿のデータをみると、長楽寺は1.6：１、粉河寺・旧中筋家住宅は３～3.5：１と、建物により重量比率が異なることが分かる。しかし員数の比率は1.6：１前後とほぼ一定していることから、これは丸・平瓦１点あたりの重量の違いが反映されていると考えられる。また熨斗瓦は平瓦と同じ形態を持つため、出土資料との比較を行う上で考慮に入れる必要がある。これを含めて算出すると第６表のようになる。

次に第７表は第25次調査で出土した各層位ごとの丸・平瓦の重量比率を示したものである。計測資料は第１表のものに準じるが、第１・２層については他の調査区域の資料も含めた。この表をみると、SH－１上面の平瓦の比率が７：１と高いことが読み取れる。それ以外の包含層資料について

第６表　建造物使用瓦の重量比率

建造物	種別	重量(kg)	員数	総重量(kg)	員数比率(平:丸)	重量比率(平:丸)	熨斗瓦総重量(kg)と平瓦との比率	熨斗瓦込みの重量比率(平:丸)
粉河寺大門	平	4.1	7,200	29,520	1.9：1	3.1：1		
	丸	2.5	3,870	9,675				
旧中筋家住宅主屋	平	1.8	5,645	10,161	1.6：1	3.1：1	2516	3.9：1
	丸	0.92	3,556	3,272			平瓦の25%	
表門	平	1.8	8,422	15,160	1.6：1	3.2：1	2923	3.8：1
	丸	0.92	5,142	4,731			平瓦の19%	
長屋蔵	平	1.8	8,712	15,682	1.6：1	3：1	1107	3.3：1
	丸	0.92	5,593	5,146			平瓦の7%	
北蔵	平	1.8	2,472	4,450	1.4：1	2.8：1	423	3.1：1
	丸	0.92	1,718	1,581			平瓦の10%	
内蔵	平	1.8	1,900	3,420	1.7：1	3.4：1	603	4：1
	丸	0.92	1,104	1,016			平瓦の18%	
長樂寺仏殿	平	1.9	5,881	11,174	1.6：1	1.8：1	1974	2.1：1
	丸	1.7	3,623	6,159			平瓦の18%	

※粉河寺・旧中筋家住宅については㈶和歌山県文化財センターから御教示を得た。

第７表　第25次出土瓦の重量比率

層　位	種別	総重量(kg)	重量比率(平:丸)
第１層	平	203	3.6：1
	丸	56	
第２層	平	514	4.9：1
	丸	105	
SH－１	平	153	7：1
	丸	22	
第３層	平	123	4.9：1
	丸	25	
第４層	平	142	3.9：1
	丸	36	
第５層	平	140	4.8：1
	丸	29	
第６層	平	141	3.9：1
	丸	36	

は５：１を越えることはなく、SH－１上面資料の平瓦の比率が高いといえる。

包含層出土瓦の重量比率は旧中筋家住宅等の熨斗瓦込みの比率と類似するが、瓦単体の重量を考慮に入れる必要がある。そこで、調査で出土した全形の分かる丸・平瓦Ａ類の重量を計測したところ、平瓦が1.8kg、丸瓦が1.4kgであった。これに第５表に示した建造物データの員数比率の平均1.6：１、熨斗瓦の割合を平瓦の20%とみて計算すると、重量比率2.5：１という概算ができる。建物の構成にもよるが、この比率はＡ類の瓦を使用した際の一応の標準値とみることができる。調査出土遺物の数値には遺物の混入等により誤差を含むとみられるが、上記の数値と照らし合わせて考えると、SH－１上面遺物は２倍以上の開きがあることから桟瓦が相当数含まれていると判断できる。

以上の検討に加えて、先の厚さ度数の考察、そして鰹面戸瓦が一定量存在することを勘案すると、多聞櫓の最終段階では桟瓦Ⅰ類が葺かれていた可能性が高いといえる。下層では比率がやや高めではあるがSH－１ほど突出していないため本瓦葺き、もしくは用いられたとしても部分的な使用であったと考えられる。

参考文献
『東京都千代田区紀尾井町遺跡調査報告書』　千代田区紀尾井町遺跡調査会　1988年
『重要文化財名手本陣妹背家住宅（主屋他二棟）修理工事報告書』㈶和歌山県文化財センター　1993年
『重要文化財長樂寺仏殿　修理工事報告書』㈶和歌山県文化財センター　1996年
『史跡和歌山城第22次発掘調査概報』㈶和歌山市文化体育振興事業団　2000年
武内雅人「瓦礫も山の賑わいか」　『考古学研究』第46巻第４号　2000年
武内雅人「丸瓦製作技術からみた近世瓦の生産と流通」『ヒストリア』第173号　2001年

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきわかやまじょう だい25・26じはっくつちょうさがいほう
書名	史跡和歌山城 第25・26次発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書
シリーズ番号	第35集
編著者名	高橋方紀・北野隆亮・奥村 薫
編集機関	財団法人 和歌山市文化体育振興事業団
所在地	〒640-8227 和歌山県和歌山市西汀丁29 TEL073-435-1195
発行年月日	西暦 2002年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
しせきわかやまじょう 史跡和歌山城	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 いちばんちょう 一番丁	3020150	指1	34° 13′ 54″	135° 11′ 40″	20010920 20020318	470	史跡整備 石垣改修

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
史跡和歌山城	城館	江戸時代	御橋廊下礎石 多聞櫓礎石 土塀基礎 石室 石垣	陶磁器・瓦 銭貨・金属器 自然遺物	御橋廊下取り付き部と多聞櫓の遺構を3時期確認。 石垣と同時に構築された石室を検出。

図　　版

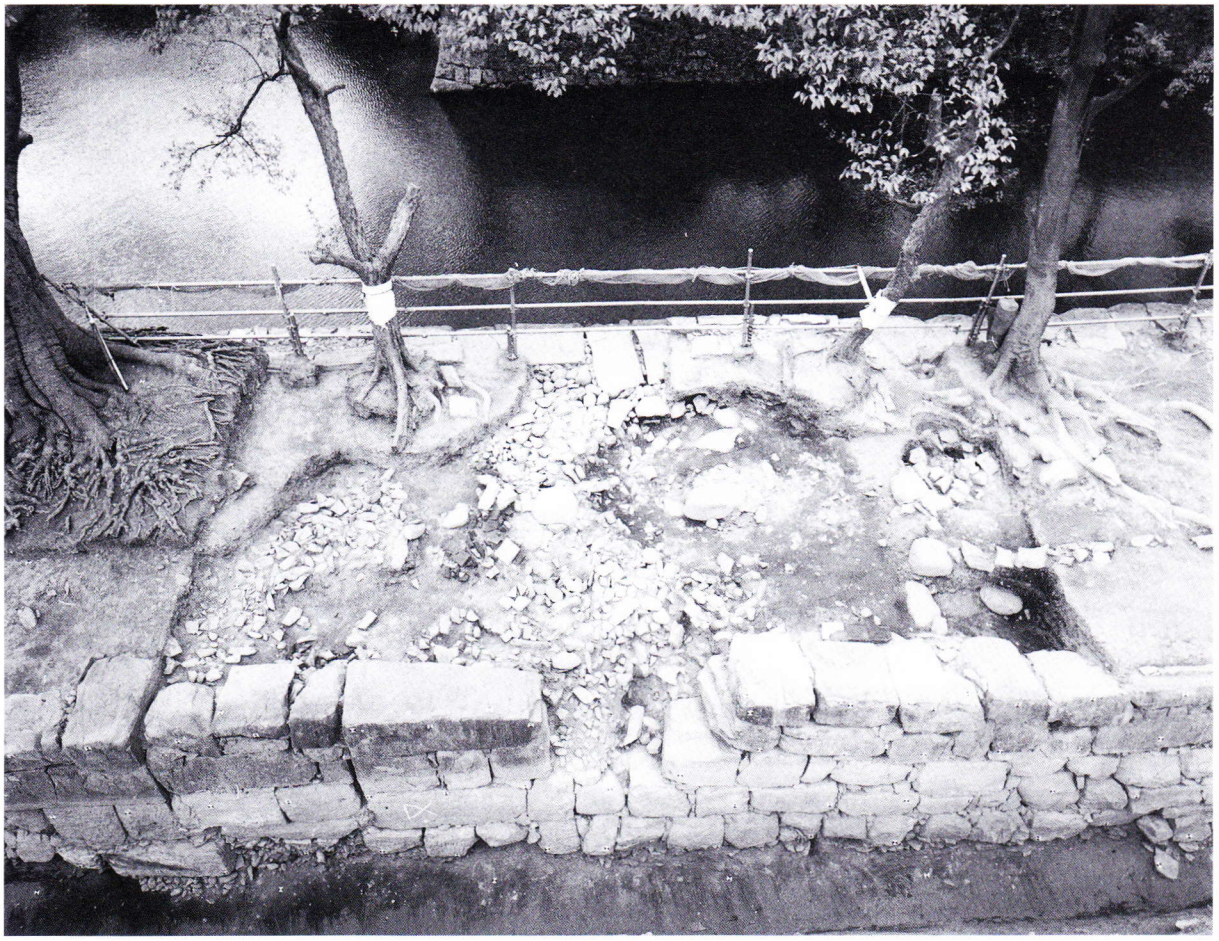
図版1　第25次調査

調査前の状況（東から）

調査地遠景（上が東）

調査地土層堆積状況（X=－196513m付近）（東から）

第1遺構面全景（北東から）



第１遺構面 御橋廊下庇柱礎石周辺（東から）

第１遺構面 御橋廊下庇柱礎石（南側）（南から）

SH－1（北から）

SH－1 礎石撤去後（X=－196504m付近）（南から）

SH－1 古段階礎石抜取痕
（北側）（南から）

SH－1 古段階礎石抜取痕
（南側）（南から）

SH－1 南端部土塀基礎
（北東から）

二の丸側石垣上端部 漆喰列（北西から）

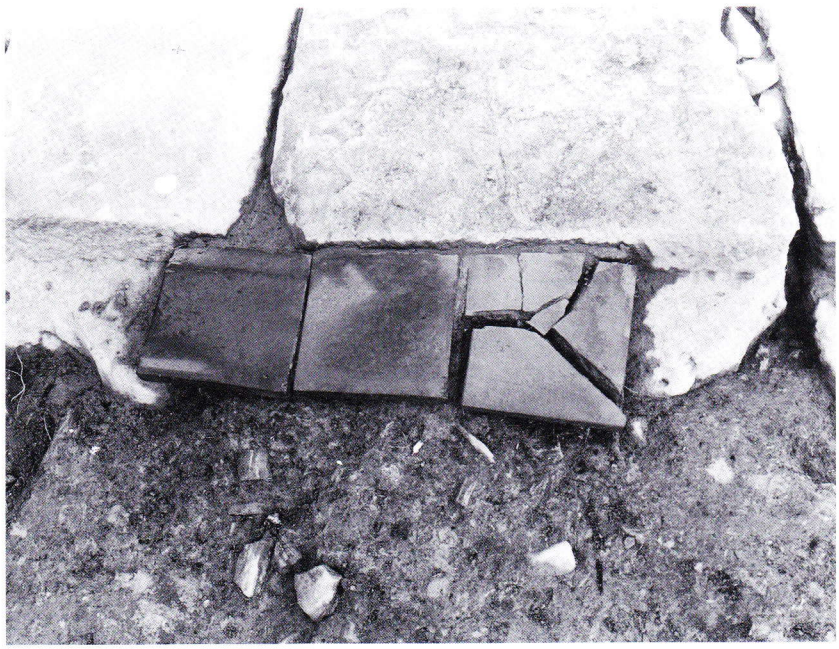
SH－2・3（北から）

第2遺構面 全景（北東から）

第2遺構面 御橋廊下関連礎石周辺（東から）

御橋廊下関連礎石（北側）
（東から）

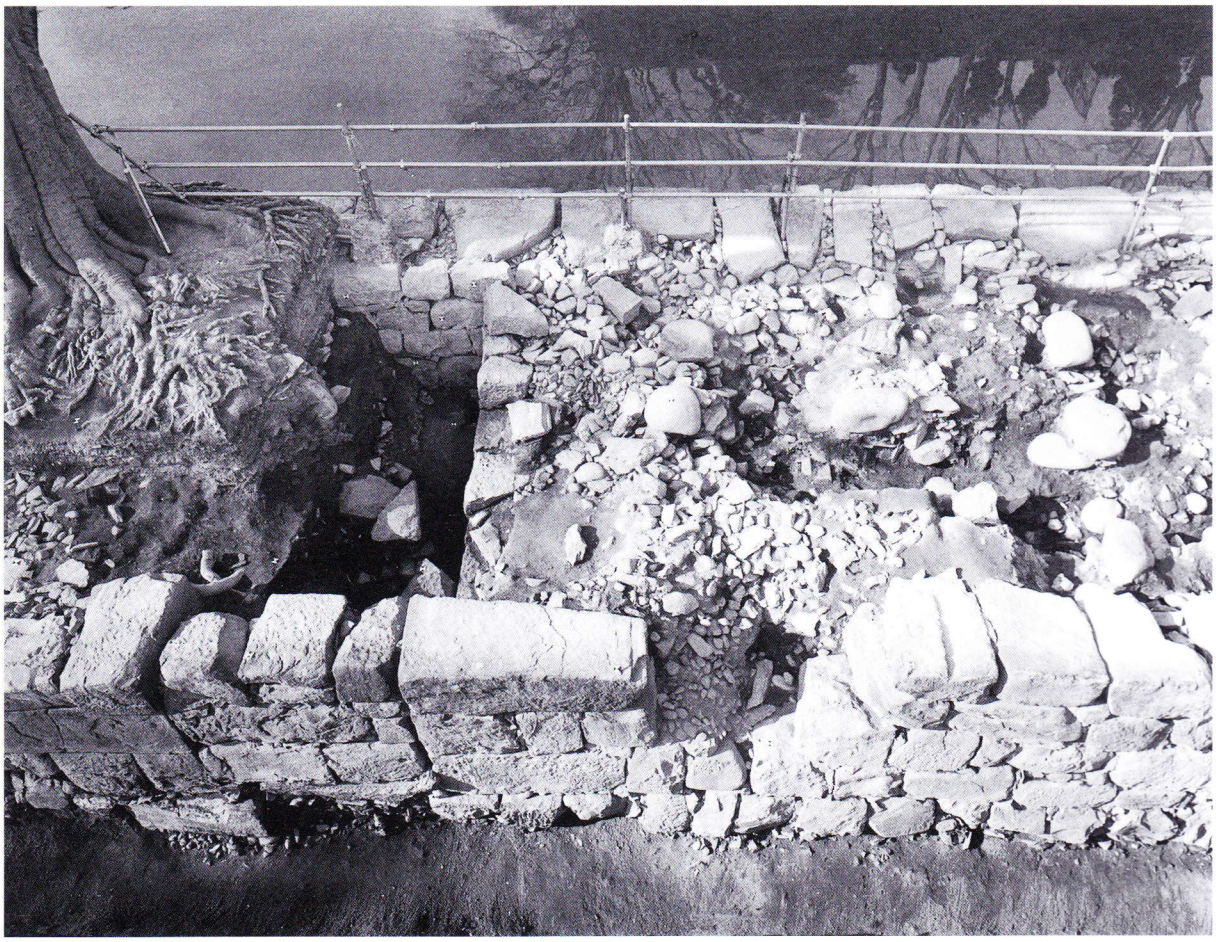
御橋廊下関連礎石（南側）
（東から）



塼敷遺構（西から）

第4b層焼土とSH－４礎石列（北東から）

第３遺構面 全景（東から）

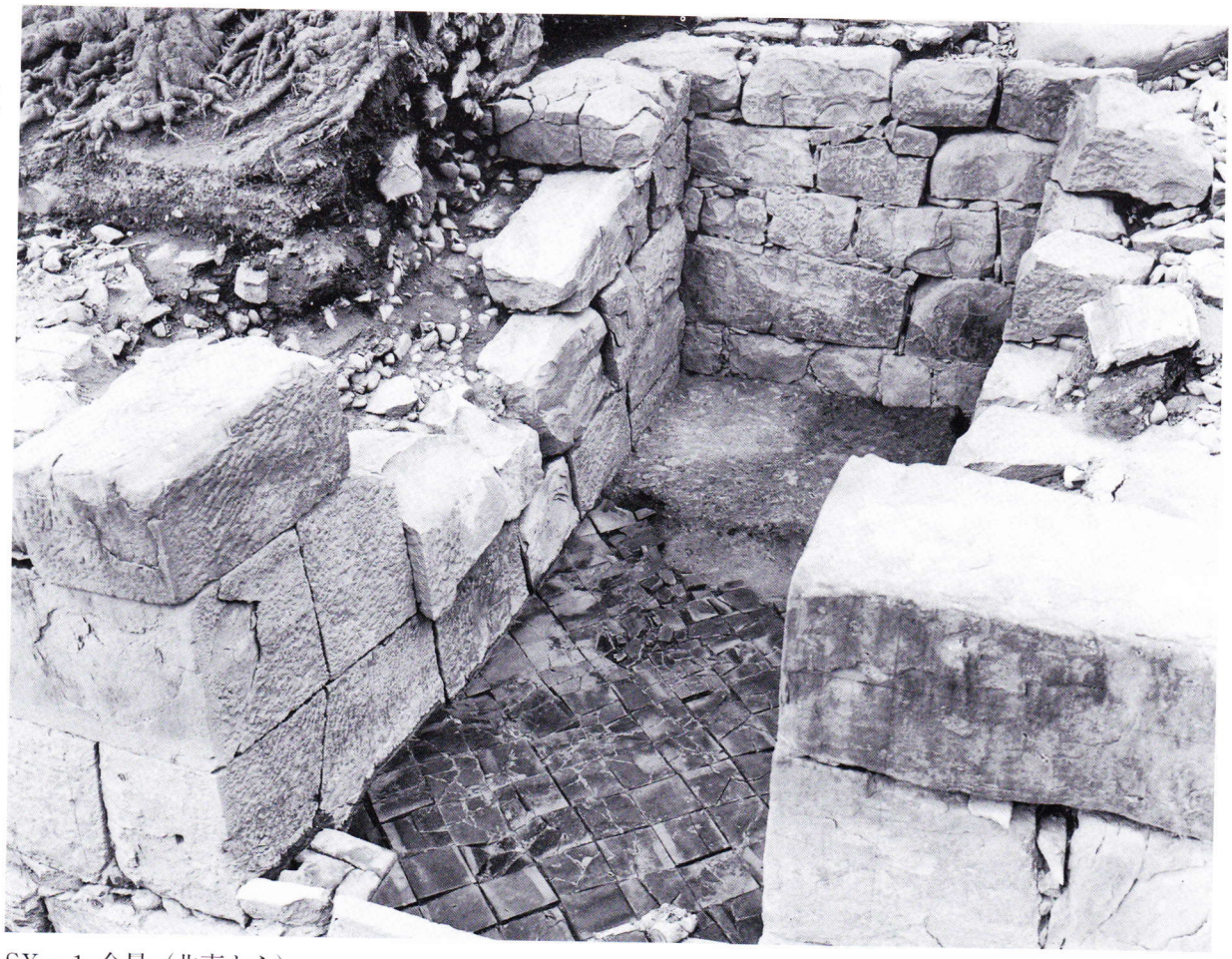


第２・３遺構面 御橋廊下関連礎石と石室（東から）

SH－４礎石と下部で検出されたSH－５礎石（南から）

SX－1 閉塞状況（東から）

SX－1　全景（東から）



SX－1 全景（北東から）

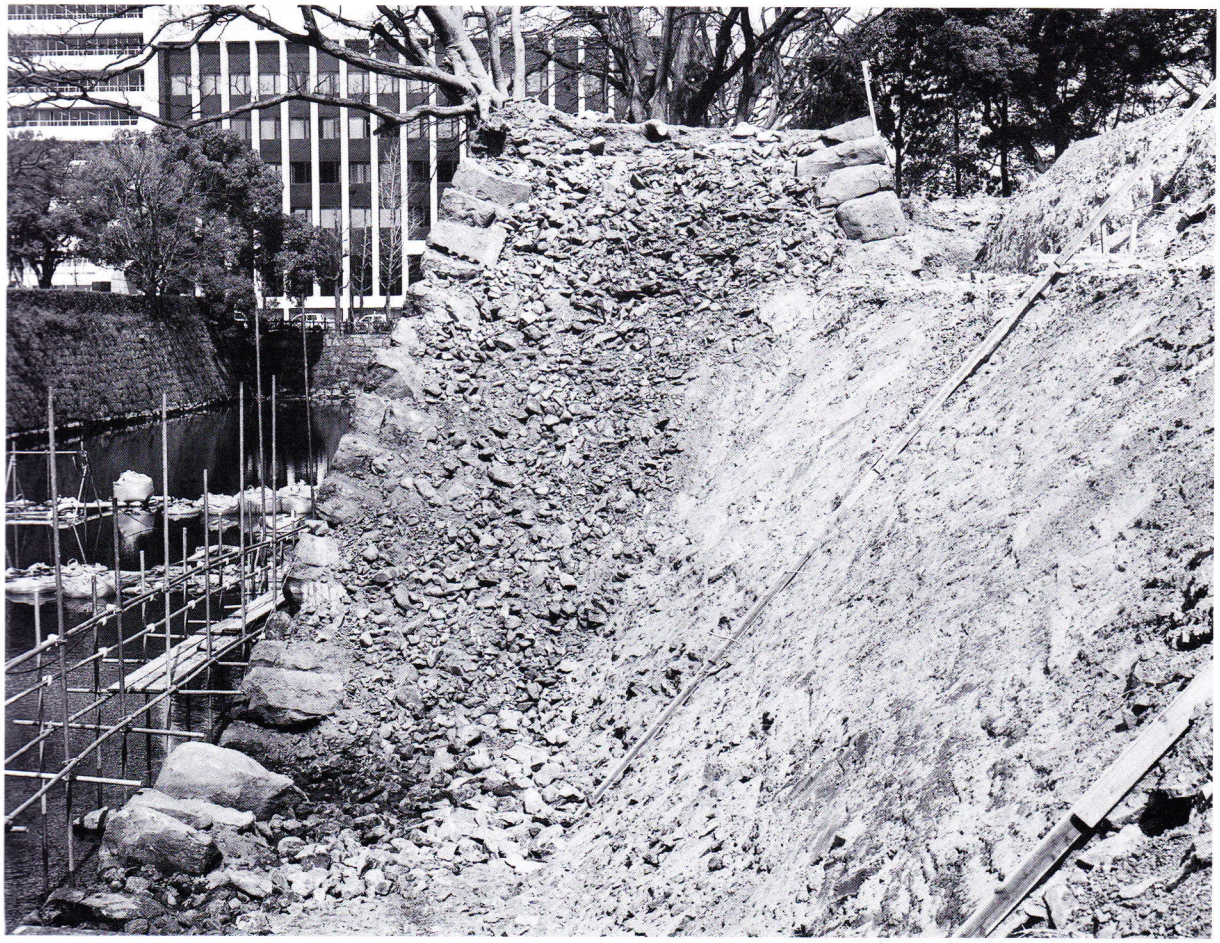
SX－1 土層堆積状況（北から）

SX－1 奥壁断割状況（北から）

SX－1 北壁断割状況（東から）

SD－1 検出状況（南から）

SD－1 完掘状況（東から）



石垣北側断面（南から）

石垣南側断面（北から）

調査前の状況（南西から）

調査地全景（西から）

石垣上面土層堆積状況（J－J'）（南から）

南端部石垣構築状況（北西から）

現在の排水溝開口部（西から）

石垣断面状況（K－K'）（南西から）

水路北側木杭検出状況（北から）

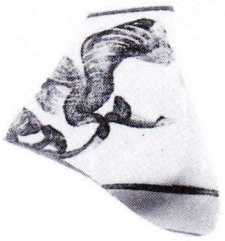
石垣断面状況（X=－196754m付近）（北から）

北端部石垣構築状況（南西から）

北端部石垣撤去後（南から）

1

SD－1出土遺物　土師器 1 皿

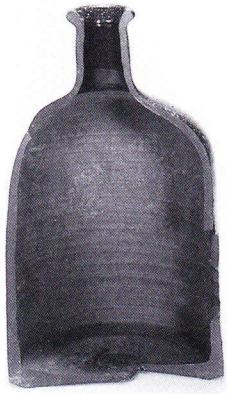


5

SH－1出土遺物　5 陶器灰落し

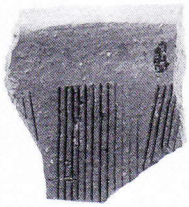
6

P－1出土遺物　6 褐釉徳利



6 同内面

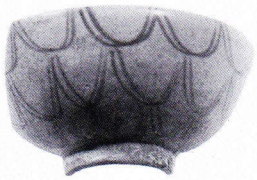
7



8

10

9



11

15

16

12

包含層出土遺物　備前焼 7 大甕、8 擂鉢　唐津焼 9 皿　瀬戸美濃系陶器 10 天目茶碗
肥前系磁器　11・12 碗、15 仏飯器　16 陶器皿

17

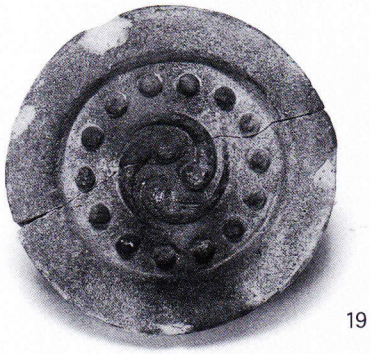
17 軒丸瓦Aa類

17

17 同裏面

18

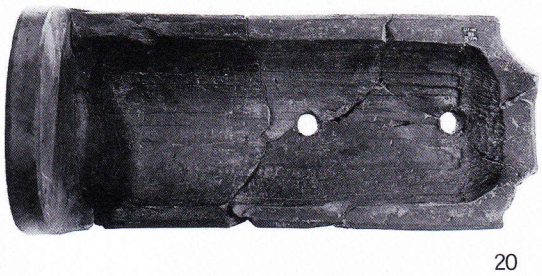
18 軒丸瓦Ab類


19

19 軒丸瓦Ac類

20

20 軒丸瓦Ba類


20

20 同裏面

21

21 軒丸瓦Bb類

22

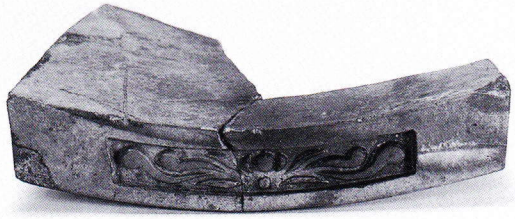
22 軒丸瓦Bc類

23

23 軒平瓦Aa類

24

24 軒平瓦Ab類

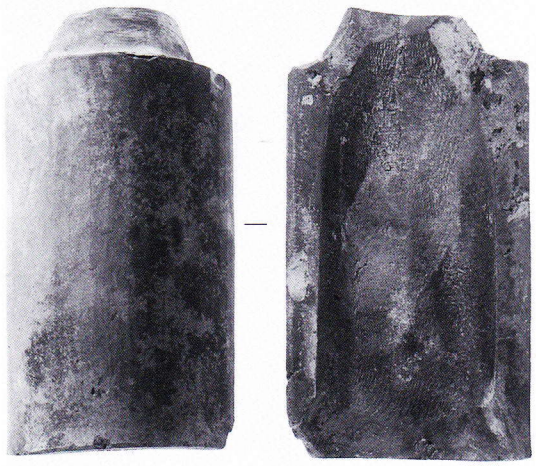


25

25 軒平瓦Ba類

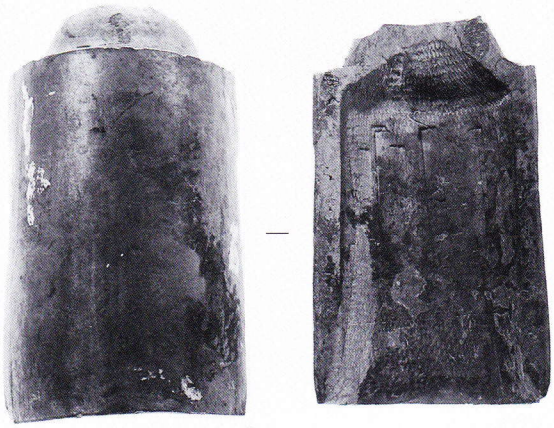
26

26 軒平瓦Bb類



27

27 丸瓦A類

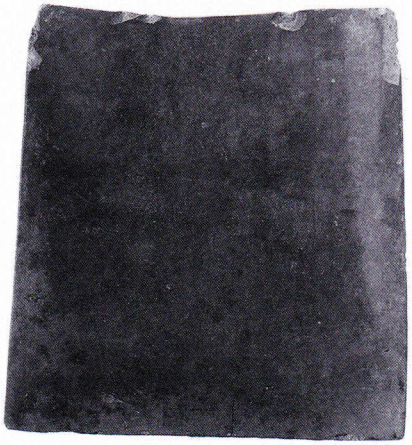


28

28 丸瓦B類

29

29 平瓦A類



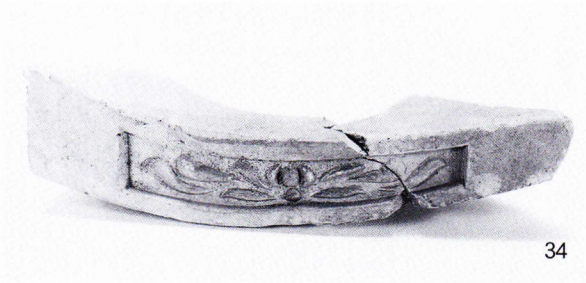
30

30 平瓦B類

31 滴水瓦 違鷹羽紋

32 軒桟瓦Ⅰa類

33 軒桟瓦Ⅰb類



34 軒桟瓦Ⅰc類

35 軒桟瓦Ⅰd類

36 軒桟瓦Ⅰe類

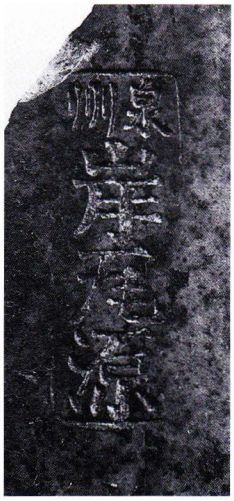
37 軒桟瓦Ⅰ類（右桟）

38 軒桟瓦Ⅱ類（左桟）

37 同裏面

39 桟瓦Ⅱ類と41 面戸瓦Ⅱ類

刻印をもつ瓦
40「紀の次」



刻印をもつ瓦
41「泉州岸瓦源」

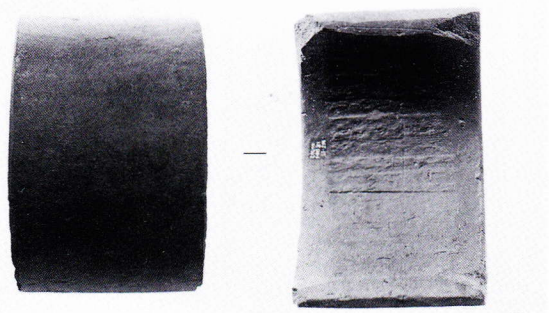
刻印をもつ瓦
42「紀の定」

刻印をもつ瓦
43「紀州多田孫…」

刻印をもつ瓦
44「…田孫三郎」

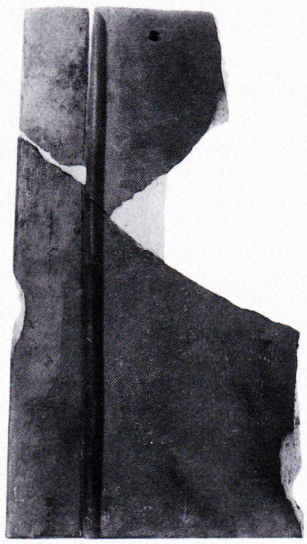
45 46

桟瓦葺き面戸瓦　45 Ⅰ類、46 Ⅱ類



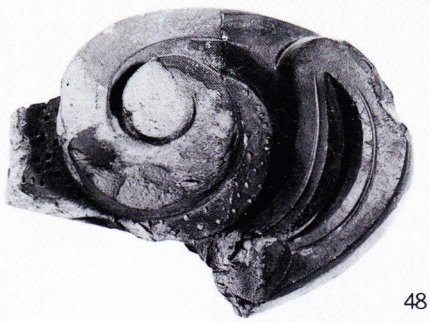
47

47 本瓦葺き面戸瓦



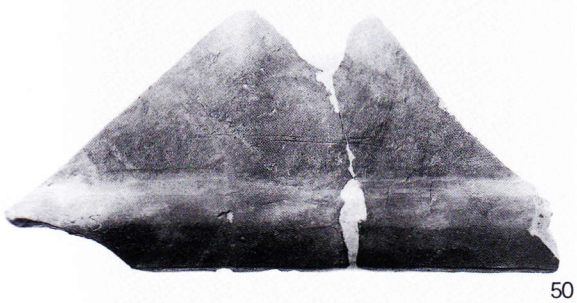
49

49 板塀瓦



48

48 鬼瓦



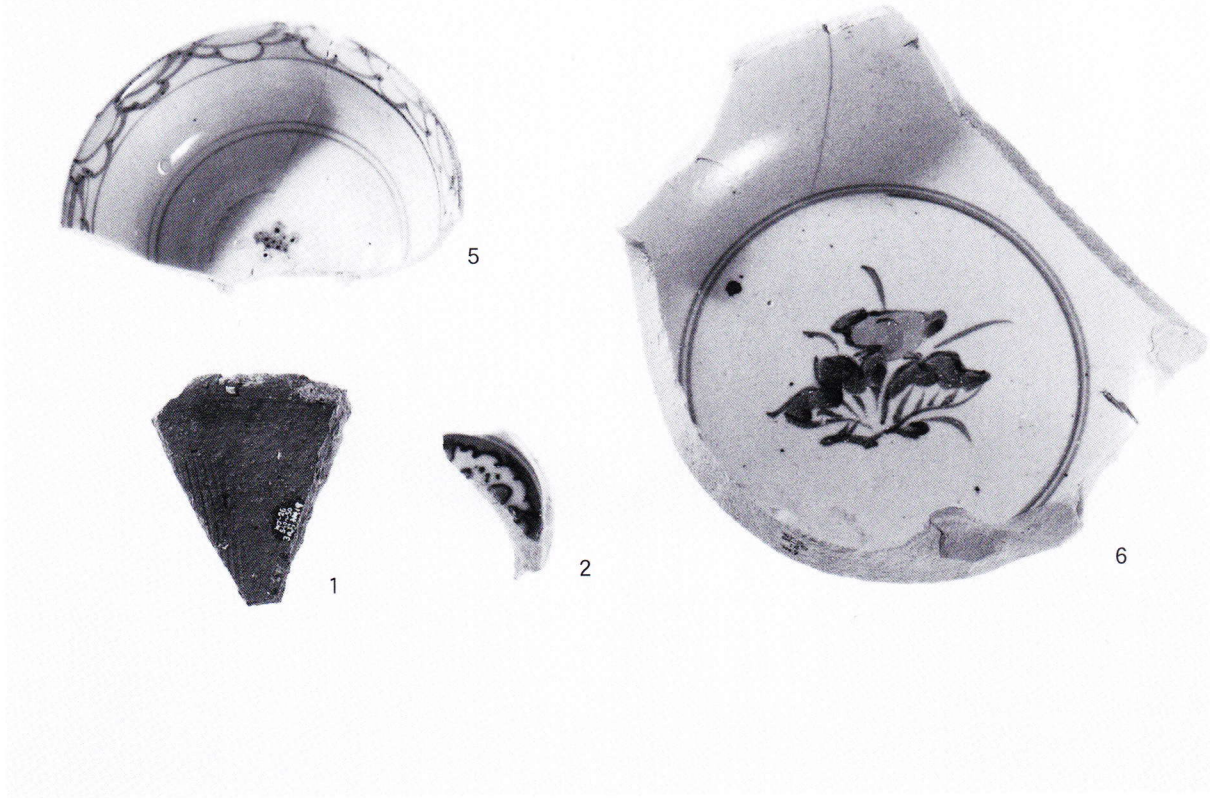
50

50 海鼠壁瓦

51

SX－1出土遺物　51 塼

金属製品　53・54 SD－1出土鉄釘、55・56 SX－1出土鉄製鏃、57～59 SX－1出土鉄釘、60 第4b層出土銅製蓋



第26次調査　包含層出土遺物　備前焼 1 擂鉢　中国製染付 2 碗　肥前系磁器 5 碗、6 鉢

平成14年３月31日発行

史跡和歌山城 第25・26次発掘調査概報

編集・発行　(財)和歌山市文化体育振興事業団
和歌山市西汀丁29番地
印　　刷　中央印刷株式会社

©(財)和歌山市文化体育振興事業団 2002